

宮城県仙台市

郡山遺跡 39

— 平成30年度発掘調査概報 —



2019.3

仙台市教育委員会

宮城県仙台市

郡山遺跡 39

— 平成30年度発掘調査概報 —



2019.3

仙台市教育委員会

序 文

日頃より仙台市の文化財行政に対しご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。市内には現在約780ヶ所の遺跡が確認されております。これらの埋蔵文化財はその時代ごとにその地に住んだ人々の痕跡を伝えるものであり、当委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、大切な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

ここにご報告いたします郡山遺跡は、地方官衙としてはわが国でも最古段階の重要な遺跡です。昭和54年以來、継続的に実施してまいりました発掘調査により、古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“魅る城柵”として私たちの前に姿を現してきました。

平成23年3月11日に発生し、東北地方に大きな爪痕を残した東日本大震災から8年の月日が経ち、郡山遺跡内で個人住宅建築、宅地造成等に伴う調査件数は増加傾向にあります。本書はそれらの調査結果を報告・公開するものであります。また、昨年度に範囲確認調査を実施しました愛宕山横穴墓群につきましても併せて報告するものであります。

これまで発掘調査を継続できましたのも遺跡の発明にご助言をいただいた先駆の諸氏や、市民の皆様のご協力があったからこそと感じております。このような文化財の調査成果が遺跡の保存と活用、そして私達の生活文化に寄与することを願ってやみません。今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成31年3月

仙台市教育委員会

教育長 佐々木 洋

例　　言

1. 本書は国庫補助事業による市内遺跡調査のうち、郡山遺跡内の個人住宅建築工事に関連した発掘調査および、愛宕山横穴墓群における確認調査の調査報告である。
2. 本概報は調査速報を目的としている。本書の作成は整備活用係が担当し、執筆は以下のように分担した。
第1章・第2章・第3章　五十嵐愛
第4章　三浦昂也
3. 本書の作成に係わる作業は、以下のように分担し、編集は五十嵐が行った。
遺物基礎整理～実測図作成、遺物図・遺構図トレイス、図版作成：五十嵐、郡山遺跡発掘調査事務所作業員
遺構記表作成・遺物観察表作成・遺物写真撮影：五十嵐
4. 本書の内容は既に公開されている各種の発表会資料に優先する。
5. 本書に係わる出土遺物や実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 断面図の標高値は、海拔高度を示している。但し、海拔高度及び座標系は、平成23年（2011）3月11日の東日本大震災以前の値を使用している。
2. 第2章の図中に示した座標系は、郡山遺跡内に昭和15年に設定し、平成8年度に改訂した任意の座標系（X=0、Y=0を通る磁北線（1984年頃の偏角で、真北から $6^{\circ}44'7''$ 西傾））で表記している。
3. 文中の方位は、真北を基準としている。また、図中の方位に「☆」を付したものは真北を示し、これ以外の方位は座標系に沿った磁北を示している。
4. 遺構の略称は次のとおりである。遺構番号はこれまでの調査を通しての番号順である。但し、ピットは調査区毎となっている。
SA：柱列・材木列　　SB：掘立柱建物跡　　SD：溝跡　　SI：竪穴住居跡　　SK：土坑
SX：性格不明遺構　　P：ピット・柱穴
5. 遺物の略号は次のとおりである。
A：縄文土器　　B：弥生土器　　C：土師器（ロクロ不使用）　　D：土師器（ロクロ使用）
E：須恵器　　F：丸瓦・軒丸瓦　　G：平瓦・軒平瓦　　I：陶器　　J：磁器
K：石器・石製品　　N：金属製品
6. 土師器実測図における網掛けは、黒色処理が施されていることを示している。その他の付着物や痕跡は図上に表記している。
7. 遺物観察表中の法量で（ ）が付いた数字は、図上で復元した推定値である。
8. 土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原1989）を使用した。
9. 第1図は、国土地理院地図1：25000「長町」を基に作成した。

目 次

第1章 はじめに	
I. 調査体制	1
II. 調査計画と実績	
1. 調査計画	1
2. 調査実績	1
第2章 郡山遺跡	
I. 第279次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	4
2. 検出遺構と出土遺物	4
3. まとめ	4
II. 第280次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	6
2. 検出遺構と出土遺物	6
3. まとめ	10
III. 第281次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	13
2. 検出遺構と出土遺物	13
3. まとめ	15
IV. 第282次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	16
2. 検出遺構と出土遺物	16
3. まとめ	21
V. 第284次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	24
2. 検出遺構と出土遺物	24
3. まとめ	27
VI. 第285次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	29
2. 検出遺構と出土遺物	29
3. まとめ	32
VII. 第289次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	35
2. 検出遺構と出土遺物	35
3. まとめ	35
第3章 愛宕山横穴墓群 - 第7次調査 -	
1. 遺跡の位置と環境	37
2. 調査経過と調査方法	37
3. 検出遺構と出土遺物	38
4. まとめ	40
第4章 調査成果の普及と関連活動	44

第1章 はじめに

I. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 文化財課長 長島栄一

整備活用係 係長 佐藤淳、主任 稲垣正志、小野寺啓次、主事 庄子裕美、五十嵐愛
文化財教諭 三浦昂也、齋藤健一

調査調整係 係長 平間亮輔、主任 及川謙作、主事 妹尾一樹、三浦一樹、相川ひとみ、小林航、柳澤楓
文化財教諭 及川基、大友渉、尾形隆寛、栗和田洋郎、佐藤文征
専門員 渡部弘美、齋野裕彦

本報告書に掲載する各調査の担当職員は以下の通りである。

郡山遺跡第279・280・281・282・284・285次調査、愛宕山横穴墓群第7次調査：五十嵐愛・三浦昂也

郡山遺跡第289次調査：柳澤楓・尾形隆寛

発掘調査・整理作業を適正に実施するため「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会」を設置し、指導・助言を受けていたが、東日本大震災以降、毎日に伴う発掘調査を優先せざるを得ない状況であったことから、調査指導委員会については、震災後はやむなく休会としている。平成31年度以降については、郡山遺跡と陸奥国分寺跡等の遺跡内での発掘調査の状況を踏まえて、委員会の再開へ向けた調整を図っていくこととする。

II. 調査計画と実績

1. 調査計画

平成30年度に計画した本書掲載の調査は、国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」の一部として計画し、郡山遺跡を対象とした。

郡山遺跡では第5次5ヶ年計画終了後に平成17年度から補足調査を実施してきたが、東日本大震災からの早期復旧・復興を考慮し、昨年度に引き続き個人住宅建築に関わる調査に特化して事業を計画した。

発掘調査総経費は28,000,000円（国庫補助金額14,000,000円）の予算で計画し、当初は郡山遺跡の個人住宅対応に6,792,000円、「仙台平野の遺跡群」として郡山遺跡以外の市域全体の個人住宅対応に7,391,400円、出土木製品の保存処理に1,803,600円、仙台城跡調査に12,013,000円とした。これによって本書の掲載に関わる発掘調査の実施計画を以下のように立案した。

遺跡名	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡	官衙内部など5箇所	約150m ²	平成30年4月～平成31年3月	個人住宅建築

表1 平成30年度発掘調査計画

2. 調査実績

郡山遺跡については、平成30年度は16箇所の調査を実施した。そのうち本報告書では、国庫補助事業の対象となる個人住宅建築に関わる調査である第279・280・281・282・284・285・289次の報告をする。なお、受託事業で行われた第276次・286次調査については本年度に刊行される『仙台市文化財調査報告書第476集 今市遺跡他発掘調査報告書』に取扱われる予定である。

遺跡名・調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡 第276次	郡山遺跡南西部	317.0m ²	平成30年4月9日～5月31日	事務所兼倉庫建築	開発に伴う本発掘調査
郡山遺跡 第278次	II期官衙南東部	76.2m ²	平成30年3月21日～3月14日	宅地造成	開発に伴う本発掘調査
郡山遺跡 第279次	II期官衙西部	4.2m ²	平成30年4月19日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡 第280次	II期官衙南東部	28.7m ²	平成30年5月7日～5月25日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡 第281次	郡山遺跡東端部	21.9m ²	平成30年6月4日～6月6日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡 第282次	I期官衙南東部	36.4m ²	平成30年6月12日～7月13日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡 第283次	郡山遺跡西部	24.0m ²	平成30年7月23日	長屋住宅建築	開発に伴う本発掘調査
郡山遺跡 第284次	I期官衙南東部	27.0m ²	平成30年7月23日～7月31日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡 第285次	I期官衙南東部	30.8m ²	平成30年8月1日～9月7日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡 第286次	II期官衙東部	134.8m ²	平成30年9月13日～10月22日	宅地造成	開発に伴う事前調査
郡山遺跡 第287次	郡山遺跡北部	5.3m ²	平成30年10月2日	道路改良	開発に伴う事前調査
郡山遺跡 第288次	II期官衙南東部	30.0m ²	平成30年10月2日～10月3日	長屋住宅建築	開発に伴う事前調査
郡山遺跡 第289次	I期官衙南東部	15.0m ²	平成30年10月24日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡 第290次	II期官衙東部	73.8m ²	平成30年11月26日～12月19日	宅地造成	開発に伴う事前調査
郡山遺跡 第291次	郡山遺跡南東部	30.0m ²	平成31年1月21日	宅地造成	開発に伴う事前調査
愛宕山横穴墓群 第7次	C地点	101.7m ²	平成30年1月9日～1月26日	範囲確認調査	

表2 平成30年度発掘調査実績（一部前年度実績を含む）



1. 郡山遺跡 2. 西台畠遺跡 3. 長町駅東遺跡 4. 北目城跡 5. 富沢遺跡 6. 大野田官衙遺跡

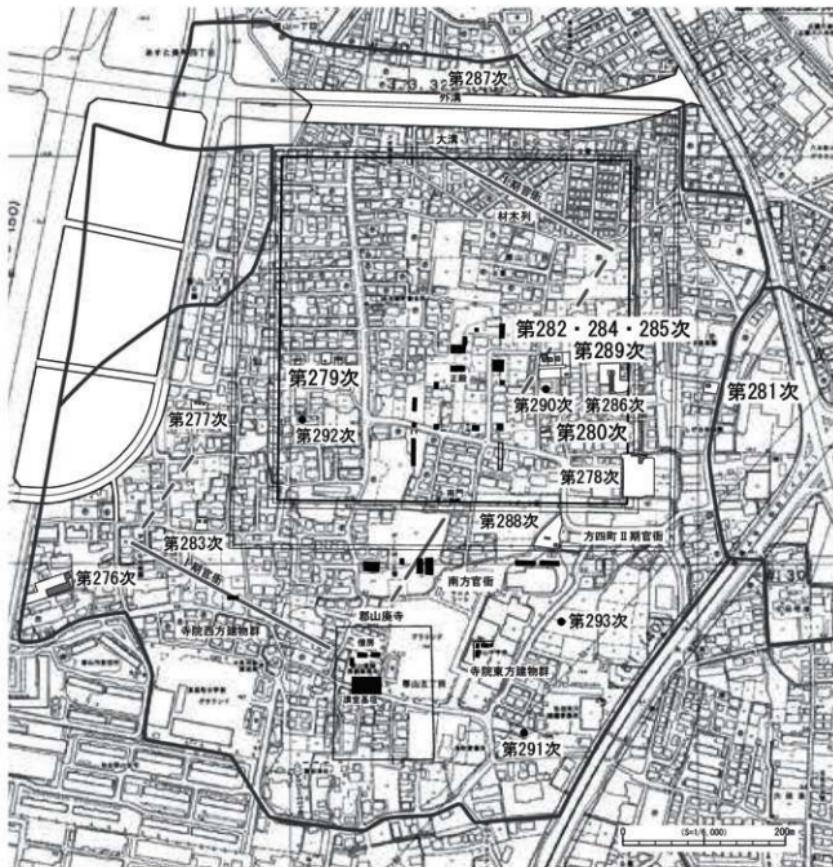
7. 愛宕山横穴墓群A地点 8. 愛宕山横穴墓群B・C地点 9. 大年寺山横穴墓群 10. 茂ヶ崎横穴墓群

11. ニツ沢横穴墓群 12. 宗押寺横穴墓群

第1図 調査遺跡位置図

なお、『郡山遺跡38－平成29年度発掘調査概報－』において、調査地点位置図に記載できなかった第277・278次調査については、第2図に調査位置を掲載する。また、平成30年度中に実施した第290・291・292・293次調査については次年度の報告とする。

愛宕山横穴墓群については平成29年度中に実施したもの、年度末であったため、『郡山遺跡38－平成29年度発掘調査概報－』では概要報告のみとしたことから、詳細については本書にて報告を行う。



第2図 郡山遺跡調査地点位置図

※調査次数の文字が大きい
ものは本報告書掲載の調査

第2章 郡山遺跡

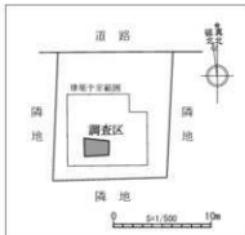
I 第279次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

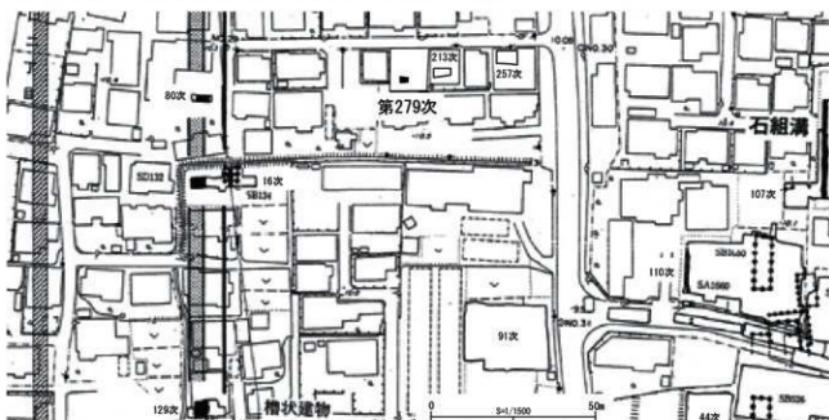
第279次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成30年3月22日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年3月28日付)が29教生文第102-653号で回答)に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙内の西部に位置し、平成23年度に調査が行われた第213次調査区、平成27年度に調査が行われた第257次調査区の西側に位置する。(第2・4図)

調査は平成30年4月19日に着手し、建築予定範囲内に東西5.0m、南北3.0mの規模で調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅰ層まで掘り下げ、Ⅱ層中(GL-1.5m)で遺構検査作業を行った。調査の記録は、平面図をS=1/40、断面図をS=1/20で作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。4月19日に調査を終了し、その後重機により埋め戻しを行った。



第3図 第279次調査区配置図



第4図 第279次調査区位置図

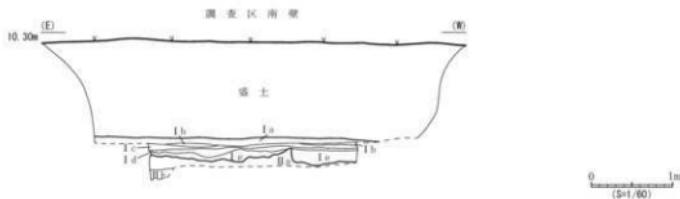
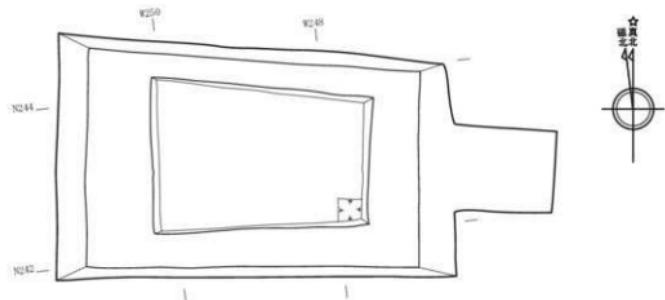
2. 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構・遺物は検出されなかった。

3. まとめ

第279次調査区は郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙内の西部に位置し、平成23年度に調査が行われた第213次調査区、平成27年度に調査が行われた第257次調査区の西側に位置する。

今回の調査区では盛土が厚く、郡山遺跡における古代の遺構検査面と考えられる基本層Ⅱ層(GL-1.5m)では遺構は検出されなかった。同様の状況は、近隣で行われた第213次・257次調査等でも確認されており、周辺でのレンガ生産による土取り等の影響で遺構面が削平されたと考えられる。



層位	色調	土質	備考・混入物
Ia	10B1/4 黒灰色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に含む 水田耕作土
Ib	3/4 暗灰色	シルト質粘土	炭化植物を含む 水田耕作土
Ic	3/4 黑色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に含む 一部クリヤ化 水田耕作土
Id	10B1/2A 黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を斑状に含む 層分界面は50%~25%白色シルト質粘土ブロックを含む マンガン鉄を含む 水田耕作土
Ie	2.5/5-1 黑灰色	シルト質粘土	Ⅱ層小ブロックを含む マンガン鉄を多量含む 水田耕作土
Iia	2.5/6-3 黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に多く含む マンガン鉄を多量含む 2.5/5-1 黑灰色粘土小ブロックを含む
Iib	2.5/8-3 淡黄色	粘土	酸化鉄を斑状に多く含む マンガン鉄を含む 2.5/5-1 黑灰色粘土小ブロックを多量含む

第5図 第279次調査区平・断面図



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区南壁土層断面（北から）

写真図版1 第279次調査区

II 第280次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

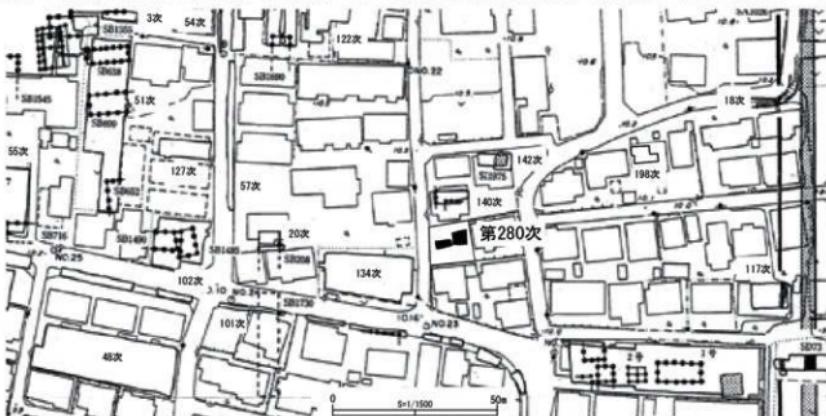
第280次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成30年4月2日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年4月5日付H30教生文第102-001号で回答)に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の中央やや東寄りに位置し、平成13年度に調査が行われた第140・142次調査区の南側、平成12年度に調査が行われた第134次調査区の東側に位置する。(第2・7図)

調査は平成30年5月7日に着手し、建築予定範囲内の東側に東西6.0m、南北5.0mの調査区、西側に東西5.0m×南北2.5mの調査区を設定した。対象地の制約上、分割して2回に分けて調査を行うこととした。東側の調査区では、重機掘削中に調査区北側で旧水道管・下水管が確認されたことから、幅1m程を掘削対象外とした。重機により盛土および基本層I～Ⅲ層を掘り下げ、Ⅳ層中(GL-約1.2m)で遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図をS=1/40、断面図をS=1/20で作製し、写真はデジタルカメラを用いて撮影した。また、調査の際に郡山遺跡の座標点(No.22)から基準点の移設を行った。5月25日に調査を終了し、その後重機により埋め戻しを行った。



第6図 第280次調査区配置図



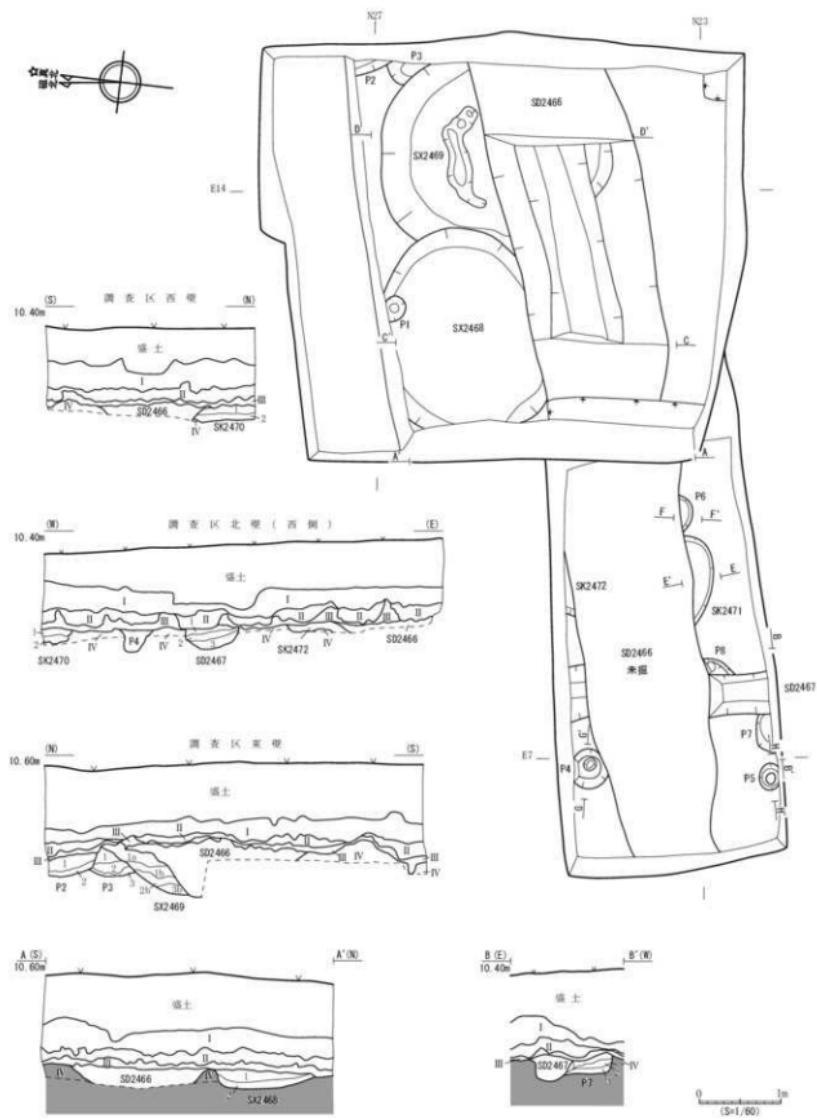
第7図 第280次調査区位置図

2. 検出遺構と出土遺物

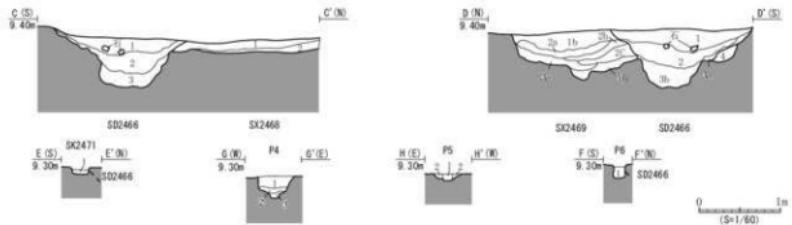
検出された遺構は、溝跡2条、性格不明遺構2基、土坑3基、ピット8基である。また、各遺構及び遺構検出面から、土師器、須恵器、鉄滓などの遺物が出土している。

[SD2466溝跡]

調査区の南側で検出された南西-北東方向の溝跡である。SX2468・SX2469性格不明遺構、SD2467溝跡、SK2471・SK2472土坑、P4・P6・P8より新しい。規模は検出長が約10.0mで、調査区外にさらに延びる。西側の調査区では安全管理上、遺構検出まで留めている。方向はN-73°-Eで、上端幅が100-180cm、中端幅が75-85cm、下端幅が30-40cmで、断面形状は上方が開くU字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約75cmで、堆積土は3層に細分される。遺物はロクロ土師器壺とみられる底部(D-111・第10図2)ほか、磨石が出土している。



第8図 第280次調査区平・断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・遺物
SD2466 (C-C')	1	55%灰褐色	粘土	SD3/1オーブル黒色粘土・7206/3オーブル灰褐色粘土を粒・中プロック状に複合する一部酸化鉄の集中箇所あり
	2	7.24±1.0m	粘土	酸化鉄を粒・塊状に多量含む
	3	2.95±1.0m	粘土	2.516/1灰褐色粘土・7207/1灰白色砂質粘土をプロック状に塊状に含む 酸化鉄を粒・塊状に多量含む
SD2466 (D-D')	1	10/95-25灰褐色	粘土質シルト	10/93/1灰褐色シルト・粘土質シルト・プロック状に塊状に含む 酸化鉄を粒・塊状に多量含む
	2	10/95-1.0m	粘土	酸化鉄を粒・塊状に多量含む
	3a	7.20/96-1.0m	粘土質シルト	10/93/1灰褐色シルト・粘土質シルト・プロック状に塊状に含む 酸化鉄を粒・塊状に多量含む
	3b	7.20/94-1.0m	粘土	10/97/10白色粘土層またはプロック状に含む 酸化鉄を粒・塊状に多量含む
SD2467	1	7.24±1.0m	シルト質粘土	鉄層を粒・少量含む
	2	7.24±1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・小プロック状に少量含む
	3	7.24±1.0m	シルト質粘土	酸化鉄を粒・少量含む
SD2468	1	10/94-1.0m	シルト質粘土	酸化鉄を粒・少量含む マンガン粒を少量含む
	2	10/94-1.0m	粘土	鉄層を粒・大プロック状に多量含む 酸化鉄を粒・微量含む
	3a	10/95-3.5±2.5灰褐色	粘土質シルト	マングルを粒・少量含む
SD2469	1b	10/95-1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・小プロック状に多量含む マンガン粒を少量含む
	2a	10/94-1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・中プロック状に多量含む マンガン粒を少量含む 灰化物 (約1cm) を少量含む
	2b	10/94-1.0m	シルト質粘土	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む 灰化物 (約5mm) を少量含む
SD2470	3c	10/94-1.0m	シルト質粘土	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む 酸化鉄粒を含む
	3d	10/94-1.0m	シルト質粘土	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む 酸化鉄粒を含む
	4	10/94-1.0m	シルト質粘土	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む 酸化鉄粒を含む
SD2471	1	7.24±1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む 酸化鉄粒を含む
	2	7.24±1.0m	シルト質粘土	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンган粒を含む
	3	10/94-1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む
SD2472	1	10/94-1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む
	2	10/94-1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む
	P1	10/94-1.0m	シルト質粘土	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を含む
P2	1	10/94-4.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・中・小プロック状に含む マンガン粒を多量含む 10/95-1灰褐色粘土小プロックを斑状に含む
	2	10/94-1.0m	粘土	鉄層を粒・中・大プロック状に多量含む
	P3	1	10/94-4.0m	シルト
P4	2	10/94-1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・中・大プロック状に多量含む マンガン粒を多量含む
	3	10/94-1.0m	粘土	鉄層を粒・中・大プロック状に多量含む マンガン粒を多量含む
	P5	1	10/94-1.0m	粘土質シルト
P6	1	10/94-1.0m	粘土質シルト	鉄層を粒・中・大プロック状に多量含む
	2	10/94-1.0m	シルト質粘土	鉄層を粒・中・大プロック状に中量含む 酸化鉄粒を少量含む 灰化物を少量含む
	P7	1	7.24±1.0m	粘土
P8	2	7.24±1.0m	粘土	鉄層を粒・中・大プロック状に中量含む 多量含む 酸化鉄粒を多量含む
	3	7.24±1.0m	粘土	鉄層を粒・中・大プロック状に中量含む 多量含む 灰化物に内包あり
	P8	1	7.24±1.0m	シルト質粘土

第9図 第280次調査 遺構断面図

[SD2467溝跡]

調査区の西側で検出された南北方向の溝跡である。P7・P8より新しく、SD2466溝跡より古い。規模は検出長が約2.5mで、調査区外にさらに延びる。方向はW~Nで、上端跡幅50~70cm、下端跡幅20~30cmで、断面形状は浅いU字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約30cmで、堆積土は3層に細分される。磨石が2点出土している。

[SX2468性格不明遺構]

調査区の北東側で検出された。SX2469性格不明遺構、P1より新しく、SD2466溝跡より古い。規模は東西2.5m以上、南北1.7m以上であり、平面形は梢円形を呈するものとみられる。遺構検出面から底面までの深さは20~25cmで、断面形状は浅い皿形を呈すると考えられる。堆積土は2層に細分される。遺物は鉄製品の可能性がある破片1点(写真4-4)や、磨石が2点出土している。

[SX2469性格不明遺構]

調査区の東側で検出された。P3より新しく、SD2466溝跡・SX2468性格不明遺構より古い。規模は東西2.5m以上、南北1.4m以上であるが、SD2466溝跡の中端付近で部分的に検出した遺構がSX2469性格不明遺構と一連の遺構である可能性が高く、その部分を加えると南北は2.9m程とみられる。平面形は円形を基調としたものと推測される。遺構検出面から底面までの深さは約60cmで、断面形状は碗形を呈するとみられる。底面に不整形な凹凸がみられる。堆積土は8層に細分される。遺物は内・外側ともにハケメ調整された土師器の鉢とみられる破片（C-1318・第10図1）や、磨石、鉄滓片など出土している。

[SK2470土坑]

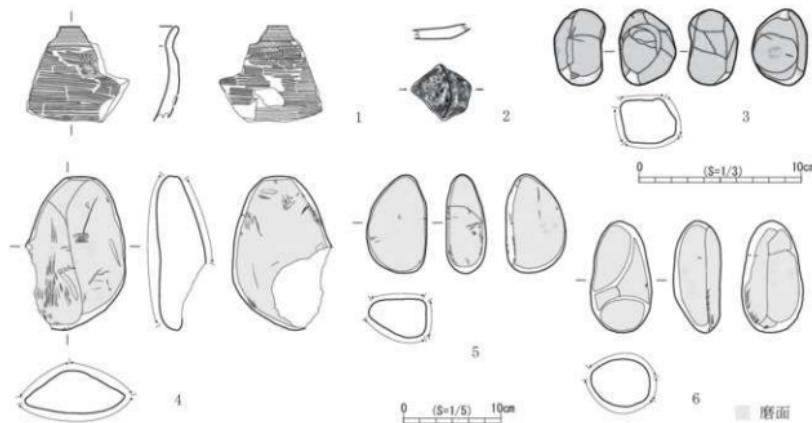
調査区の西壁と北壁でのみ確認された。SD2466溝跡より古い。平面形および断面形状は不明である。規模は東西40cm以上、南北75cm以上であり、深さは約20cmである。堆積土は2層に細分される。遺物は出土していない。

[SK2471土坑]

調査区の中央部で検出された。SD2466溝跡より古い。平面形は円形を基調としたものと推測され、規模は東西110cm以上、南北30cm以上で、深さは約8cmである。断面形状は浅い皿形を呈すると推測される。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

[SK2472土坑]

調査区の北壁際で検出された。SD2466溝跡より古い。平面形・断面形状は不明である。規模は東西80cm以上、南北10cm以上で、深さは10cm以上である。確認できた堆積土は1層である。SK2471土坑と一連の遺構である可能性も考えられる。遺物は出土していない。



回収番号	登録番号	種別	路名	出土遺構	法量 (cm)	外側調整・付着物等	内側調整・付着物等	写真
1	C-1318	上部器	鉢?	SX2469	基高: 約5.9	1.0縁部: ヨコナデ 体部: ハケメ→一部ナデ	1.0縁部: ヨコナデ 体部: ハケメ→一部ナデ	4-1
2	D-411	上部器	鉢?	SD2466	基高: 約1.0	摩耗、底部: 回転式切り	摩耗	4-2
3	E-404	磨石器	磨石?	SD2466	長さ: 4.7 幅: 3.5 厚さ: 2.9 重量: 70 g	磨面: 4面	磨面: 4面	4-3
4	E-401	磨石器	磨石?	SD2466	長さ: 15.8 幅: 10.2 厚さ: 4.7 重量: 865 g	磨面: 3面	磨面: 3面	4-4
5	E-402	磨石器	磨石?	SD2466	長さ: 10.2 幅: 6.2 厚さ: 4.1 重量: 353 g	磨面: 3面	磨面: 3面	4-5
6	E-403	磨石器	磨石?	SD2466	長さ: 11.6 幅: 6.3 厚さ: 4.9 重量: 500 g	磨面: 3面	磨面: 3面	4-6

第110図 第280次調査 溝跡・性格不明遺構出土遺物

【ピット】

今回の調査区からは8基のピットが検出された。平面形状は円形を基調としたものが主体であり、規模がわかるものは直径30~50cm、深さは10~35cmを測る。柱痕跡が検出されたのはP5のみである。遺物は出土していない。

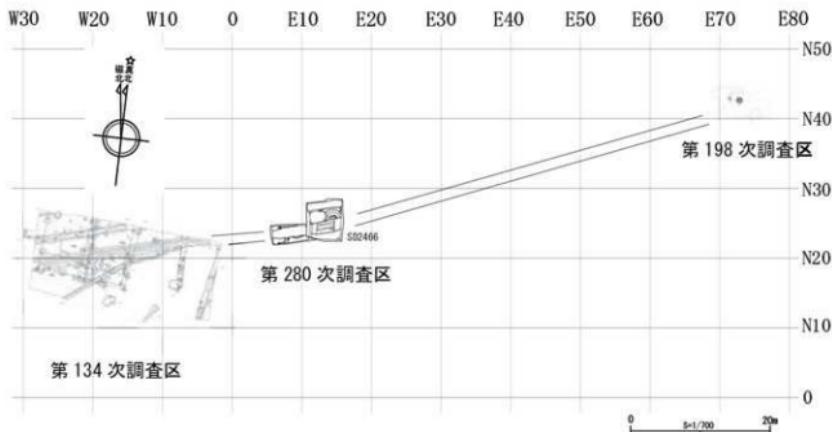
3. まとめ

今回の第280次調査区からは溝跡2条（SD2466・SD2467）、性格不明遺構2基（SX2468・SX2469）、土坑3基（SK2470・SK2471・SK2472）、ピット8基が検出された。

このうち、SD2466溝跡は方向および規模・形状などから、第134次調査で検出されているSD1959溝跡と一連の溝跡の可能性が高いと考えられる。SD1959溝跡については、出土遺物から古代末期の溝跡と考えられており、平行して延びるSD1962溝跡とともに、道路跡や屋敷跡の区画などの可能性が考えられている（仙台市教育委員会2001）。なお、北東側に位置する第198次調査区で確認されているSD2223溝跡とも規模・形状が似通っており、同一の溝跡である可能性も考えられるが、周辺の調査を進めていく中で検討する必要がある。

SX2468・SX2469性格不明遺構については、周辺の調査で類似する遺構は検出されておらず、遺構の性格は不明であるが、鉄滓が出土していることから、周辺で鍛冶に関わる作業が行われていた可能性が考えられる。

今回の第280次調査区では主に古代末期と考えられる溝跡が検出されたが、今後も周辺での調査を進める中で、官衙廃絶後の遺構の在り方についても検討していく必要がある。



第11図 周辺の調査区と遺構配置



1. 調査区東側遺構検出状況（東から）



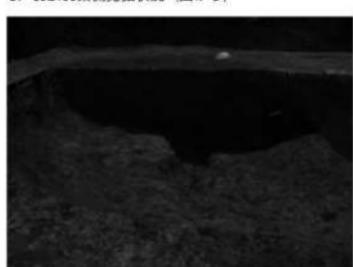
2. 調査区西側遺構検出状況（西から）



3. SD2466東側完掘状況（西から）



4. SD2466 (C-C') 土層断面（東から）



5. SX2469 (D-D') 土層断面（西から）



6. 調査区東側遺構完掘状況（西から）



7. 調査区西側遺構完掘状況（北東から）



8. 調査区東壁土層断面（西から）

写真図版2 第280次調査区（1）



1. A-A'土層断面（東から）



2. 調査区北壁(西側)土層断面（南から）

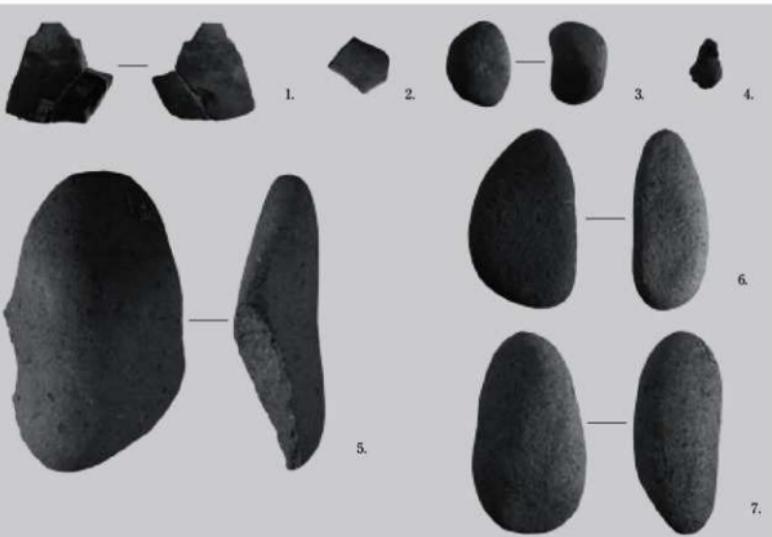


3. 調査区北壁（中央）土層断面（南から）



4. 調査区北壁（東側）土層断面（南から）

写真図版3 第280次調査区（2）



1: S32469性格不明遺構 2-3-5-6-7: SD2466溝跡 4: S32468性格不明遺構

写真図版4 第280次調査出土遺物

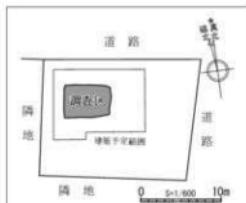
III 第281次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第281次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成30年4月25日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年5月1日付H30教文第102-041号で回答)に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡の東端に位置し、北目城跡に隣接する。昭和61年度に調査が行われた第67次調査区の南側、平成29年度に調査が行われた第274次調査区の北側に位置する。(第2・13図)

調査は平成30年6月4日に着手し、建築予定範囲内に東西6.0m、南北4.0mの規模で調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅰ～Ⅵ層を掘り下げ、Ⅶ層中(GL-1.4m)で遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図をS=1/40、断面図をS=1/20で作製し、写真はデジタルカメラを用いて撮影した。6月6日に調査を終了し、その後重機により埋め戻しを行った。



第12図 第281次調査区配置図



第13図 第281次調査区位置図

2. 検出遺構と出土遺物

検出された遺構は、溝跡1条、土坑2基、性格不明遺構1基である。遺物は出土していない。

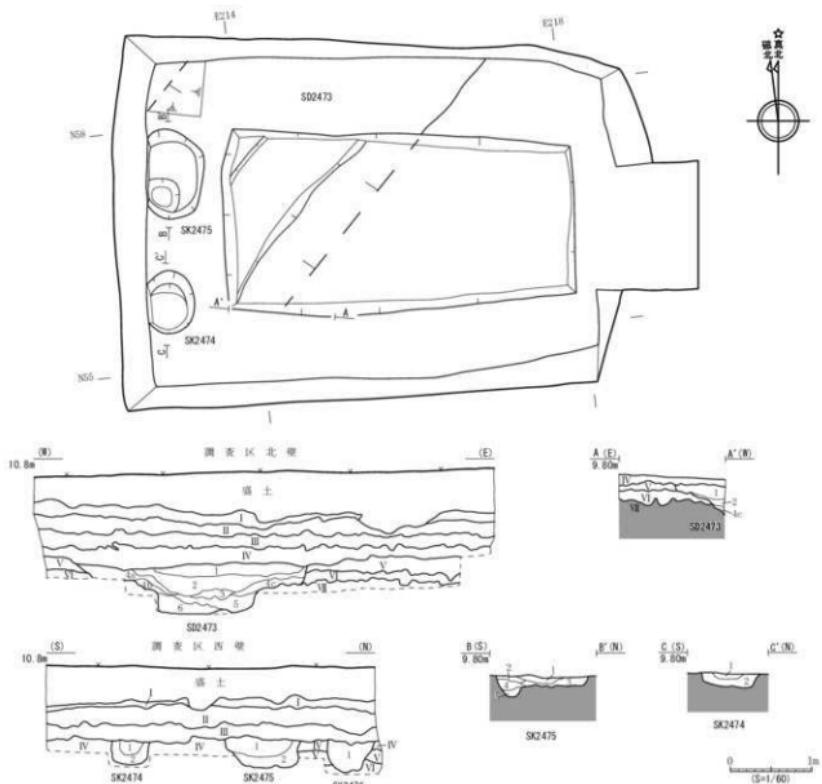
基本層Ⅶ層中で遺構検出作業を行ったが、調査区壁断面を観察した結果、溝跡は基本層V層から、土坑・性格不明遺構は基本層IV層から掘り込まれていることを確認した。

【SK2473溝跡】

調査区の西側で検出された南西-北東方向の溝跡である。SK2474・SK2475土坑より古い。規模は検出長が約4.0mで、調査区外にさらに延びる。方向はN-39°-Eで、上端幅は約2.8mと推測される。遺構検出を行った際に基本層Ⅶ層中で検出されたのは溝の中端にあたり、中端幅は約90cm、下端幅は約80cmである。断面形状は上方が開く逆台形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約60cmで、堆積土は大別6層、細別8層に細分される。底面から中端に堆積する5・6層については水成堆積と考えられる。1～4層については掘り直しが行われた後の堆積土の可能性が考えられる。

【SK2474土坑】

調査区の西端で検出された。平面形は梢円形と推測され、規模は東西60cm以上、南北約80cmで、深さは約30cmである。断面形状はU字形を呈すると推測される。堆積土は2層に細分される。



地層名	層位	色調	土質	備考・混入物
系本層	I	7.50m-1.2m: 黄褐色	粘土質シルト	7.50m-1層灰白色斑点を薄層状に含む
	II	7.50m-2.5m: 黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒を微量含む 10.8m-2.5m白色砂質シルトを薄層状または小プロック状に含む φ15-20mmの礫を含む
	III	10.93-3.1: 黄褐色	シルト	均質 7.50m-2.5m白色砂質シルト小プロックを少量含む → 構造土?
	IV	10.93-4: 黄褐色	粘土質シルト	上部に10.93-2.5m白色砂質シルト質粘土を不規則に含む → 構造土?
	V	10.93-4.15: 黄褐色	粘土質シルト	10.97-1.0m白色、6.1m塊状砂土を粘土中にプロック状に含む
	VI	10.93-1.0m: 黄褐色	粘土	
	VE	10.93-4.15: 黄褐色	粘土質シルト	10.94-4層白色砂質シルトを絞→中プロック状に少量含む
SK2473	1	10.94-1.0m: 黄褐色	粘土質シルト	微小なマンガン粒を多量含む
	2	10.94-1.0m: 黄褐色	シルト質粘土	V層を絞→小プロック状に含む 10.95-1層灰色粘土を絞→小プロック状に少量含む マンガン粒を多量含む
	3	10.93-2.5m: 黄褐色	粘土	V層 プロックを少量含む
	4a	10.94-1.0m: 黄褐色	シルト質粘土	V層を絞→小プロック状に少量含む
	4b	10.95-2.5m: 黄褐色	シルト質粘土	V層を絞→小プロック状に少量含む
	4c	10.94-3.15: 黄褐色	シルト質粘土	V層を絞→小プロック状に少量含む
	5	10.95-2.5m: 黄褐色	粘土	五層
SK2474	1	10.96-4.15: 黄褐色	粘土	炭化物粒 (φ約1cm) を含む
	2	10.96-1.0m: 黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒 (φ約5mm) を含む 3層を粒状に含む
SK2475	1	10.96-1.0m: 黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒を多量含む
	2	10.96-2.5m: 黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒を多量含む
	3	10.97-3.15: 黄褐色	シルト質粘土	10.94-2.5m黄色粘土柱状を境に多量含む 炭化鉄粒を含む
	4	10.95-2.5m: 黄褐色	粘土質シルト	炭化鉄粒をやや多量含む
	5	10.95-2.5m: 黄褐色	シルト質粘土	3層 プロック状を境に含む 炭化鉄を少量含む
SK2476	1	10.94-4.0m: 黄褐色	粘土質シルト	プロックが塊状に凝る
	2	10.96-4.15: 黄褐色	粘土質シルト	
	3	10.94-1.0m: 黄褐色	粘土	

第14図 第281次調査区平・断面図

【SK2475土坑】

調査区の西端で検出された。平面形は椭円形と推測され、規模は東西70cm以上、南北約110cmで、深さは30~40cmである。断面形状は不整形である。堆積土は5層に細分される。

【SX2476性格不明遺構】

調査区の西壁でのみ確認した。規模・平面形は不明である。断面形状は上方がやや開くU字形で、深さは40cm以上とみられる。堆積土は基本層IV~VI層が入り混じった單層であり、人為的に埋め戻されたと考えられる。

3. まとめ

今回の第281次調査区からは溝跡1条（SD2473）、土坑2基（SK2474・SK2475）、性格不明遺構1基（SX2476）が検出された。このうちSD2473溝跡については遺物が出土しておらず、遺構の時期は不明である。南西の延長線上に位置する第166次調査区では同様の溝跡は確認されておらず、北東の延長線上（北目城跡内）では調査が行われていないため、溝跡の全体形については不明である。なお、土坑・性格不明遺構については、IV層の耕作に伴う遺構と考えられる。

今回の第281次調査区では、時期不明の南西~北東方向の溝跡が検出されたが、官衙に伴う遺構であるか等については、今後の周辺での調査事例の蓄積を待って検討していく必要がある。



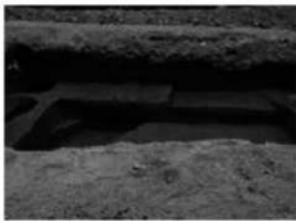
1. 調査区全景遺構検出状況（南から）



2. SD2473完掘状況（南から）



3. 調査区全景遺構完掘状況（南から）



4. 調査区北壁土層断面（南から）



5. 調査区南壁土層断面（北から）



6. 調査区西壁土層断面（東から）

写真図版5 第281次調査区

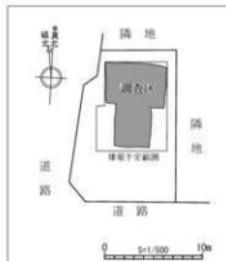
IV 第282次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第282次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成30年4月12日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年4月24日付H30教文第102-034号で回答)に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡Ⅰ期官衙中枢部の前面（東面）付近に位置する。平成15年度に調査が行われた第152次調査区、平成17年度に調査が行われた第171次調査区の南側に位置し、平成18年度に行われた第178次調査区の北側に位置する。（第2・16図）第152次調査区とは部分的に重複している。

調査は平成30年6月12日に着手し、建築予定範囲内に東西4.5~6.2m、南北8.9mの規模で調査区を設定したが、対象地の都合上、南北に分割して2回に分けて調査を行うこととした。重機により盛土および基本層Ⅰ~Ⅲ層を掘り下げ、IV層上面(GL-1.2m)で遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図・断面図をS=1/20で作製し、写真はデジタルカメラを用いて撮影した。7月13日に調査を終了し、その後重機により埋め戻しを行った。



第15図 第282次調査区配置図



第16図 第282次調査区位置図

2. 検出遺構と出土遺物

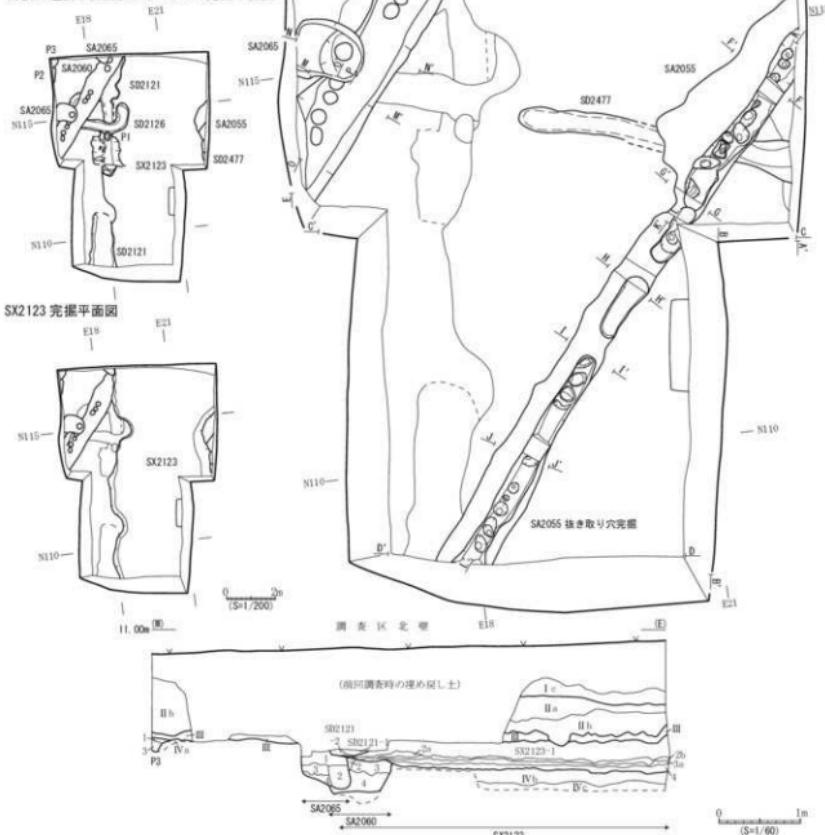
検出された遺構は、材木列跡2列、一本柱列1列、溝跡3条、性格不明遺構1基、ピット3基である。また、各遺構や遺構検出面などから土師器や陶器などが出土している。

【SA2055材木列記】

調査区の南東部で検出された北東-南西方向の材木列跡であり、第152・171次調査で検出されているSA2055材木列跡と一連の遺構であると判断した。SD2477溝跡より新しく、SD2121溝跡、SX2123性格不明遺構より古い。規模は検出長が約8.2mで調査区外にさらに延びる。方向はN-32°-Eである。検出した範囲の大半はSX2123性格不明遺構やSD2121溝跡によって上部が削平されているが、上端幅20~30cmの溝状の抜き取り穴底面において、直径10~20cmの柱の抜き取り痕跡が検出された。溝状の抜き取り穴および柱の抜き取り痕跡は、一部途切れる箇所はあるが、ほぼ連続して検出された。溝状の抜き取り穴は材木列掘方の東側に寄っており、残りの良い箇所での深さは約40cmである。材木列掘方の上端幅は30~110cm、下端幅は20~55cmで、深さは残りの良い箇所で約50cmである。

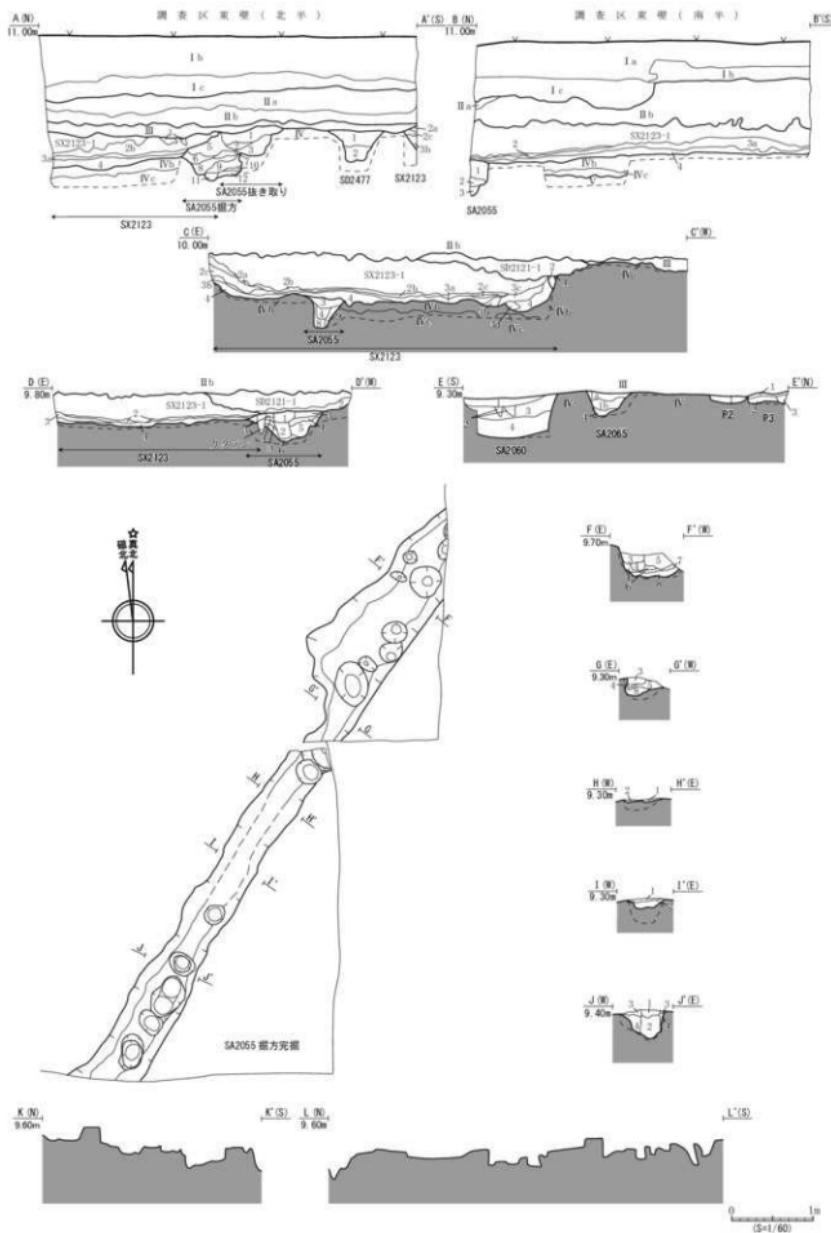


再検出遺構平面図およびSK2121 完掘平面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
基本層	I a	10304-4褐色	砂質シルト	10305-3に赤い黄褐色シルトブロックを含む 盛土
	I b	10304-3に赤い黄褐色	砂	10305-3に赤い黄褐色砂・10303-1黒褐色砂質シルト大ブロックを斑状に含む 盛土
I c	10303-4褐色	シルト	10305-3に赤い黄褐色砂・10303-1黒褐色砂質シルト大ブロックを斑状に含む 盛土 マンガン柱を含む	
II a	10304-1褐色灰褐色	粘土質シルト	炭化鉄(φ1cm~1cm)をやや多量含む 10307/10白色シルト質粘土を粒~大ブロック状に多量含む 酸化鉄を粒~塊状に含む	
II b	10304-1褐色灰褐色	粘土質シルト	炭化鉄(φ1cm~1cm)を中量含む 10307/10白色シルト質粘土を粒~中ブロック状にやや多量含む 酸化鉄を粒~塊状に含む 10304-2赤褐色粘土シルトブロックを斑状に含む	
II	10305-2赤褐色	シルト質粘土	10304-1褐色シルト質粘土・2層に赤大ブロック状に覆被に含む(中層一部集中的に極多量含む)	
Na	2.987-3赤褐色	粘土質シルト	10304-2赤褐色粘土を粒~中ブロック状に含む 酸化鉄を含む 一部グリーン化(5%~20%オリーブ色)	
Nb	5.986-294リード色	砂質粘土	斑状に500g/㎡青灰色に変色 10304-1褐色粘土を粒~小ブロック状に含む 酸化鉄を含む	
Nc	5.986-294リード色	粘土質砂	斑状に500g/㎡青灰色に変色 10304-1褐色粘土を粒~小ブロック状に含む 酸化鉄を含む	
V	10308-294白色	粘土	10304-1褐色粘土を小ブロック状に含む マンガニッシュ・酸化鉄柱を多量含む 層上部が部分的にグリーン化	

第17図 第282次調査区平・断面図



断面形状は逆台形状とみられる。抜取り穴が掘方底面まで及んでいない箇所では、掘方底面近くの東壁沿いに並ぶ状態で柱痕跡が検出された。堆積土は掘方埋土が最大で8層、抜取り穴が最大で3層に細分される。遺物は出土していない。

【SA2060材木列跡】

調査区の北西側で検出された北東～南西方向の材木列跡であり、北側については第152次調査で検出されている。SA2065一本柱列、SD2121・SD2126溝跡、SX2123性格不明遺構より古い。規模は検出長が約5mで、調査区外にさらに延びる。方向はN-33°-Eである。掘方の上端幅が60～70cm、下端幅が50～60cmで、遺構検出面から底面までの深さは約50cmである。断面形状は箱形に近い逆台形状とみられる。掘方のやや西寄りに直径15～25cmの柱痕跡が検出された。柱痕跡は一部途切れる箇所はあるが、ほぼ連続して検出された。柱痕跡の深さは一定していない。堆積土は4層に細分される。遺物は出土していない。

【SA2065一本柱列】

調査区の北西側で検出された柱列であり、第152次調査で部分的に精査が行われている。検出した範囲は北東～南西1間以上、総長約3.2m（推定柱間寸法約2.8m）で、調査区外にさらに続く。SA2060材木列跡より新しく、SD2121・SD2126溝跡、SX2123性格不明遺構より古い。方向はN-34°-Eである。柱穴掘方の平面形は隅丸長方形とみられ、規模は長軸が95cm以上、短軸が約70cm、深さが約50cmである。堆積土は4層または6層に細分される。柱痕跡の直径は20～25cmである。遺物は土師器の小片が1点出土している。

【SD2121溝跡】

調査区の西側で検出された南北方向の溝跡であり、北側については第152次調査で精査が行われている。SA2055・SA2060材木列跡、SA2065一本柱列、SX2123性格不明遺構、SD2126溝跡より新しい。幅や深さが一定ではなく、一部途切れる箇所も確認された。規模は、途切れた箇所も含めた検出長が約8.6mで、調査区外にさらに延びる。方向はN-4°-Eである。上端幅が40～130cm、下端幅が25～95cmで、断面形状は歪な皿形を呈する。底面には部分的に凹凸がみられる。遺構検出面から底面までの深さは約3～30cmで、堆積土は2層に細分される。遺物は出土していない。

【SD2126溝跡】

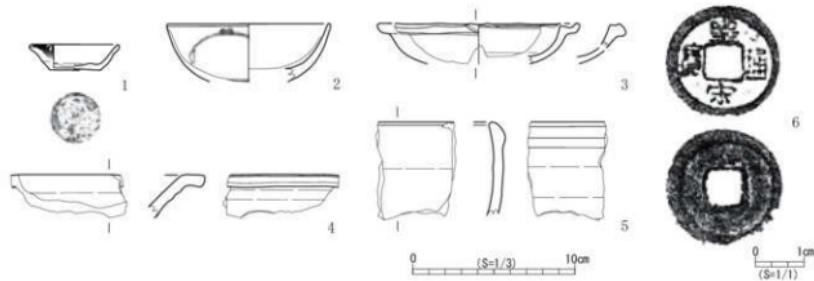
調査区の北西側で検出されたコの字形の溝跡である。SA2055・SA2060材木列跡、SA2065一本柱列、SX2123性格不明遺構より新しく、SD2121溝跡より古い。第152次調査で精査が終了しているため再精査は行っていない。

【SD2477溝跡】

調査区の北東側で検出された東西南北方向の溝跡である。SX2123性格不明遺構、SA2055材木列跡より古い。規模は検出長が約3.4mで、調査区東側にさらに延びる。方向はE-10°-Sである。検出した範囲の大半はSX2123性格不明遺構やSA2055材木列跡によって上部が削平されている。最も残りの良い調査区東壁際では、上端幅が約70cm、下端幅が約20cmで、断面形状は上部が開く逆台形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約40cmで、堆積土は2層に細分される。遺物は出土していない。

【SX2123性格不明遺構】

調査区の東側で検出されており、北側は第152次調査でも検出されている。SA2055・SA2060材木列跡、SA2065一本柱列、SD2477溝跡より新しく、SD2121・SD2126溝跡より古い。規模は東西4.2m以上、南北8.6m以上で、調査区外にさらに広がる。深さは35～50cmで、断面形状は底面がほぼ平坦な逆台形を呈するとみられる。堆積土は9層に細分される。遺物は灯明皿（Ia-2・第20図1）や、近世陶器の鉢とみられる破片（I-66・第20図5、I-67・第20図4）、近世の磁器の破片（J-16・第20図2、J-17・第20図3）、皇宋通宝（N-159・第20図6）のほか、磨石や礫、木片やクルミの殻などが出土している。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点	法量(cm)	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	位置関係
1	I-a-2	上縁買上器	打削皿	SD2123	L1径: 54 底径: 3.2 高さ: 1.6	ロクロナデ 底部・回転赤切り 油煙付着	ロクロナデ 油煙付着	A-1
2	J-16	瓶型	瓶	SD2123	L1径: 100 高さ: 96.5	把柄 取付		A-2
3	J-17	瓶型	瓶	SD2123	L1径: 63.3 高さ: 92.5	大断面 直縁 小中底		A-3
4	J-67	陶器	鉢?	SD2123	鉢高: 9.2			A-4
5	J-66	陶器	鉢?	SD2123	鉢高: 9.6			A-5
6	J-159	金属製品	鍍金	SD2123	径: 1.95 重量: 3.2g	皇宋通宝(初唐年1089年)		B-6

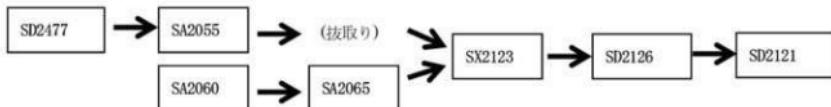
第20図 SX2123性格不明遺構出土遺物

【ピット】

今回の調査区からは3基のピットが検出された。平面形状はP1が平行形、P2・P3は部分的な検出のため不明である。P2・P3は位置関係から、第152次調査で確認されているSD2075溝跡など、別種の遺構の一部である可能性も考えられるが、詳細が不明なためピットとして扱った。柱痕跡は検出されておらず、遺物も出土していない。

3.まとめ

今回の第282次調査区からは材木列跡2列 (SA2060・SA2055)、一本柱列1列 (SA2065)、溝跡3条 (SD2121・SD2126・SD2477)、性格不明遺構1基 (SX2123)、ピット3基が検出された。主な遺構の重複関係は以下のとおりである。ただし、並列して標記した遺構が必ずしも同時期を示すものではない。



SA2055・SA2060材木列跡、SA2065一本柱列についてはI期官衙に伴う遺構と考えられており、SD2126・SD2121溝跡、SX2123性格不明遺構についてはそれ以降の時期の遺構と考えられる。SD2121溝跡は第152次調査において出土した遺物から、官衙より新しい時期の溝跡と考えられている（仙台市教育委員会2004）。SX2123性格不明遺構についても、出土した遺物から、明らかに官衙より新しい時期の遺構と考えられ、これより新しいSD2126溝跡についても同様である。

SA2055材木列跡とSA2060材木列跡については、近接する位置関係から同時存在ではないと考えられており、SA2060材木列跡とSA2065一本柱列については、I期官衙内の別時期の遺構である可能性や、SA2060材木列の存続期間中における補修等の可能性を考えられている（仙台市教育委員会2004）。

今回の第282次調査区では、I期官衙の外郭東辺を区画する材木列跡と一本柱列が検出されたが、遺構の併存関係などについては、今後も周辺での調査を重ね、検討していく必要がある。



1. 調査区北側造構検出状況（南から）



2. 調査区南側造構検出状況（南から）



3. 調査区北側SX2123完掘・SA2055検出状況（南から）



4. 調査区南側SX2123完掘・SA2055検出状況（南から）



5. 調査区北側SA2055柱抜き取り痕跡完掘状況（南から）



6. 調査区北側SA2055掘方検出状況（南西から）



7. 調査区南側SA2055抜き取り穴完掘状況（南から）



8. 調査区北側SA2055掘方完掘状況（南西から）

写真図版6 第282次調査区（1）



1. SA065柱穴半裁状況（南から）



2. SA2060柱痕踏出状況（南から）



3. 調査区北側遺構完掘状況（南から）



4. 調査区南側遺構完掘状況（南から）



5. 調査区東壁（北側）土層断面（西から）



6. 調査区南壁土層断面（北から）

写真図版7 第282次調査区（2）



写真図版8 第282次調査出土遺物

V 第284次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第284次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成30年7月10日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年7月11日付H30教生文第102-157号で回答)に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡Ⅰ期官衙中枢部の前面(東面)付近に位置する。平成15年度に調査が行われた第152次調査区、平成17年度に調査が行われた第171次調査区の南側に位置し、平成18年度に行われた第178次調査区の北側に位置する。(第2・22図)

調査は平成30年7月23日に着手し、建築予定範囲内に東西5.3m、南北5.0mの規模で調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅰ～Ⅲ層を掘り下げ、Ⅳ層上面(GL-1.0～1.1m)で遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図・断面図をS=1/20で作製し、写真はデジタルカメラを用いて撮影した。7月31日に調査を終了し、その後重機により埋め戻しを行った。



第21図 第284次調査区配置図



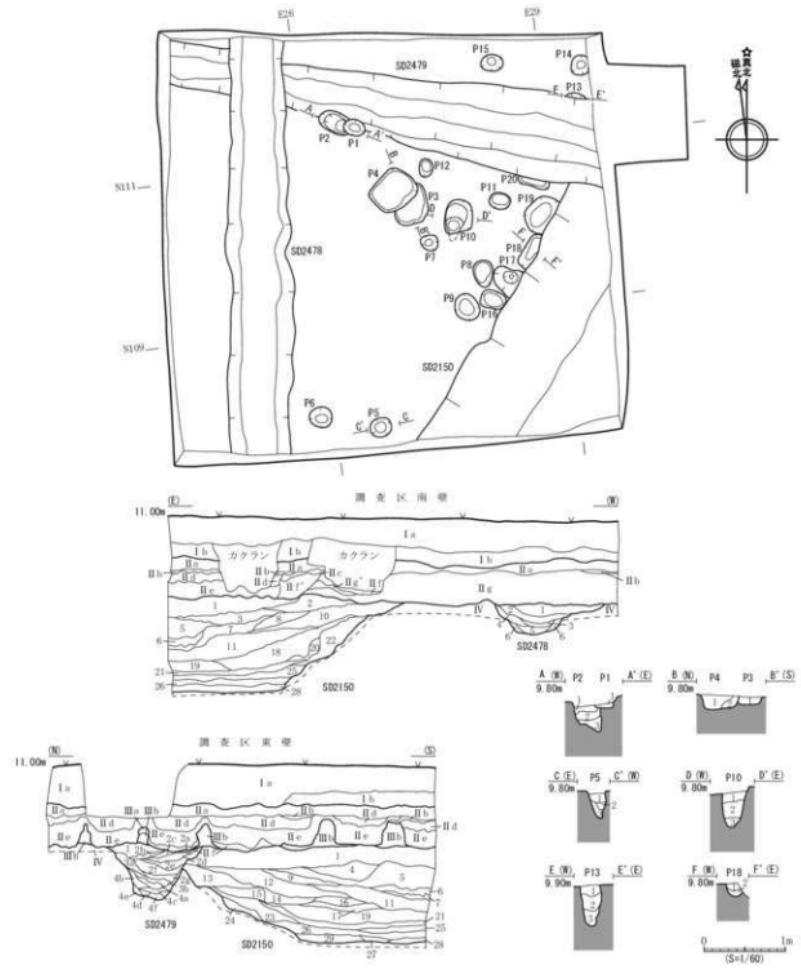
第22図 第284次調査区位置図

2. 検出遺構と出土遺物

検出された遺構は、溝跡3条、ピット20基である。また、各遺構及び遺構検出面から、ロクロ土師器や陶器の小片、磨石などの遺物が出土している。

[SD2150溝跡]

調査区の南東側で検出された北東-南西方向の溝跡であり、第178次調査で検出されているSD2150溝跡同一の溝跡であると判断した。P17・18・19より新しく、SD2479溝跡より古い。調査区の関係上、溝跡の西側のみの検出となっている。規模は検出長が約3.7mで、調査区外にさらに延びる。方向はN-34°-Eで、検出した幅は上端が約2.0m、下端が約1.0mである。断面形状は底面がほぼ平坦な逆台形を呈するとみられ、第178次調査区において確認されている西壁側のテラス状の平坦面は確認されていない。遺構検出面から底面までの深さは約1.2mで、堆積土は29層に細分される。1～7層は人為的に埋め戻されたと考えられるが、以下の層は自然堆積層とみられ、部分的に粘土と砂の細かい互層を成す層も確認されており、水成堆積と考えられる。遺物は出土していない。



第23図 第284次調査区平・断面図

調査名	層位	色調	土質	備考・混入物
S20150	1	10YR3-4H褐色	粘土	10YR3-1黑褐色粘土を粒~大ブロック状に塊状に含む
	2	5YR4-1H褐色	粘土	10YR3-1黑褐色粘土・青緑色を粒~小ブロック状に含む 酸化鉄を含む
	3	10YR4-4褐色	粘土	塊状に混ざる 青緑色を粒~中ブロック状に中量含む 酸化鉄を含む
	4	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	10YR3-2黑褐色粘土上に青緑色を粒~小ブロック状に块状に含む
	5	10YR3-2H褐色	粘土	青緑色 10YR5-3L-3H-4V褐色粘土を粒~小ブロック状に塊状に混ざる
	6	10YR6-6H褐色	粘土	10YR2-2L-3H-4V褐色粘土 10YR3-1黑褐色粘土をブロック状に塊状に含む
	7	10YR3-1H褐色	粘土	10YR3-1黑褐色粘土を粒~小ブロック状に塊状に含む
	8	10YR6-4H褐色	粘土	10YR4-1暗褐色粘土・10YR3-1黑褐色粘土を粒~中量含む 酸化鉄を含む
	9	10YR4-4褐色	粘土	10YR4-2暗褐色粘土が粒~小ブロック状に塊状に混ざる 青緑色を中量含む マンガン鉄を含む
	10	5YR4-1H褐色	粘土	5YR4-1暗褐色粘土・10YR3-1黑褐色粘土を粒~中量含む 青緑色を含む
	11	10YR6-1H褐色	粘土	細かい互層 酸化鉄を多量含む 西側が一部グリ化
	12	10YR4-2H褐色	粘土	酸化鉄を含む 青緑色を少量含む
	13	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	10YR4-1暗褐色粘土・青緑色がブロック状に塊状に混ざる
	14	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	酸化鉄を少量含む
	15	10YR5-2H褐色	粘土	10YR4-2暗褐色粘土上・下層が軟状に塊状に混ざる 酸化鉄・マンガン鉄を多量含む
	16	10YR6-2H褐色	粘土	部分的に10YR3-1H褐色粘土を粒~薄層状に含む 酸化鉄を多量含む
	17	10YR6-1H褐色	粘土	部分的に10YR3-1H褐色粘土を粒~薄層状に含む 10YR6-1暗褐色粘土を少量含む 酸化鉄を含む
	18	10YR7-2L-3H-4V褐色	粘土	細かい互層 酸化鉄を多量含む 10YR3-1H褐色粘土を少量含む
	19	10YR6-2H褐色	粘土	あまり見当たらないが互層の10YR3-1H褐色粘土を薄層状に含む 10YR8-1灰白色粘土を粒~小ブロック状に中量含む
	20	7.5YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	酸化鉄を粒~塊状に多量含む マンガン鉄を含む
	21	7.5YR4-1H褐色	粘土	50%5-1青灰色粘土上に塊状に混ざる 酸化鉄を含む 青緑色を含む
	22	50%5-1青灰色	粘土	10YR3-1黑褐色粘土を粒~小ブロック状に中量含む 酸化鉄を多量含む
	23	10YR5-6H褐色	粘土	細かい状態に塊状に混ざる 下部に酸化鉄を含む
	24	10YR5-2H褐色	粘土	青緑色粘土~大ブロック状に塊状に混ざる マンガン鉄を多量含む
	25	10YR5-6H褐色	粘土	10YR5-2H褐色粘土上に粒状に塊状に混ざる
	26	10YR5-2L-3H-4V褐色	粘土	部分的に10YR6-2暗褐色粘土・10YR3-1黑褐色粘土をブロック状に塊状に含む 酸化鉄を含む
	27	10YR5-2H褐色	粘土	10YR5-4L-5H-6V褐色粘土を粒~中量含む 酸化鉄を多量含む
	28	10YR8-2H褐色	粘土	10YR3-1暗褐色粘土を粒~大ブロック状にやや多量含む 10YR5-4灰鉄をブロック状に含む
	29	10YR5-2H褐色	粘土	青緑色とブロック状に塊状に混ざる 酸化鉄を多量含む
S20478	1	10YR4-2H褐色	粘土質シルト	下部に青緑色大ブロック状に中量含む 50%4-1暗褐色粘土を粒~小ブロック状に含む
	2	10YR4-2H褐色	シルト質粘土	青緑色を少量含む 50%4-1暗褐色粘土を粒~小ブロック状に含む
	3	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色と50%4-1暗褐色粘土を粒~中量含む
	4	10YR6-1H褐色	粘土	青緑色 50%4-1暗褐色粘土を粒~中量含む
	5	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色を少量含む
	6	7.5YR5-2Hオリーブ色	粘土	粒~中ブロック状に塊状に混ざる
	7	5N6/4-1暗褐色	粘土	
	8	10YR4-2H褐色	粘土質シルト	青緑色~大ブロック状に中量含む
	9	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色を中量含む
	10	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色を中量含む
S20479	1	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色~小ブロック状に中量含む
	2	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	部分的に10YR6-3L-3H-4V褐色粘土を薄層状に含む
	3	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色を少量含む
	4	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色を少量含む
	5	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色を少量含む
	6	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色を少量含む
	7	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色を少量含む
	8	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色を少量含む
	9	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色を少量含む
	10	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色を少量含む
P1	1	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土質シルト	青緑色~小ブロック状に少量含む
P2	1	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	青緑色~小ブロック状にやや多量含む
P3	2	2.5YR4-3H褐色	粘土質シルト	10YR4-3L-3H-4V褐色粘土を粒~中量含む
P4	3	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	青緑色を粒~小ブロック状に少量含む
P5	1	7.5YR4-1H褐色	粘土	青緑色~少量含む
P6	2	10YR6-1H褐色	粘土	青緑色~少量含む
P7	3	10YR6-1H褐色	粘土	青緑色~少量含む
P8	4	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色を粒~少量含む
P9	5	10YR7-6H褐色	粘土	10YR4-3L-3H-4V褐色粘土を粒~小ブロック状に含む
P10	6	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	青緑色~少量含む
P11	7	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	青緑色~少量含む
P12	8	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	青緑色~少量含む
P13	9	10YR4-3L-3H-4V褐色	粘土	青緑色~少量含む
P14	10	10YR4-2H褐色	粘土	10YR4-2暗褐色粘土を粒~小ブロック状に含む
P15	11	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色~少量含む
P16	12	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色~少量含む
P17	13	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色~少量含む
P18	14	10YR4-2H褐色	粘土	10YR4-2暗褐色粘土を粒~小ブロック状に含む
P19	15	10YR4-2H褐色	粘土	青緑色~少量含む

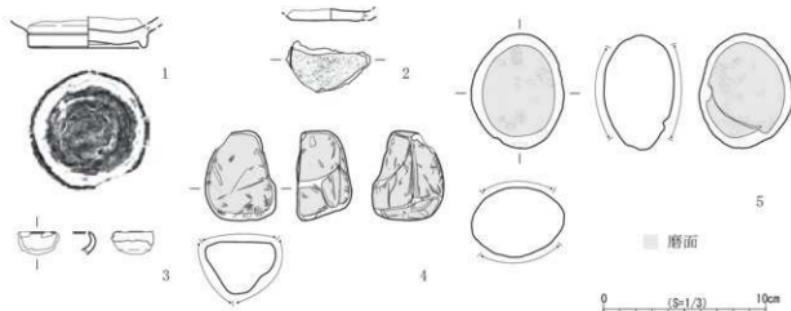
表3 第284次調査 土層記注表

[SD2478溝跡]

調査区の西側で検出された南北方向の溝跡である。SD2479溝跡より新しい。規模は検出長が約5.1mで、調査区外にさらに延びる。方向はW-1°-Nで、上端幅約65~80cm、下端幅が40~50cmで、断面形状は正な逆台形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約40cmで、堆積土は6層に細分される。遺物は出土していない。

[SD2479溝跡]

調査区の北側で検出された東西方向の溝跡である。SD2150溝跡、P13・20より新しく、SD2478溝跡、P1・2より古い。規模は検出長が約5.5mで、調査区外にさらに延びる。方向はE-10°-Sで、上端幅約55~110cm、中端幅が60~85cm、下端幅が20~30cmで、断面形状は底面がやや平坦な逆台形を呈する。上端幅に変化がみられるが、溝跡の西側については溝跡の中端付近での検出となっており、調査区西壁の断面観察を行った結果、本来上端幅に大きな変化はなかったと考えられる。遺構検出面から底面までの深さは約60cmで、堆積土は16層に細分される。遺物はロクロ土師器の底部(D-113・第24図1、D-114・第24図2)や、陶器の乗場とみられる破片(I-68・第24図3)、砥石(K-406・第24図4)や磨石(K-407・第24図5ほか)などが出土している。



団体 番号	登録 番号	種別	器形	出土地点	直徑(cm)	外側調整・付着物等	内面調整・付着物等	万葉 団書
1	D-113	赤土器	高台付环	SD2479	直徑: 7.1 厚さ: 約1.9	ロクロナデ 底部: 回転系切り	ロクロナデ	10-1
2	D-114	土師器	环?	SD2479	直徑: 5.6 厚さ: 約0.8	底面: 回転系切り	ミガキ 黒色処理?	10-2
3	I-68	陶器	乗場?	SD2479	直徑: 約1.4			10-3
4	K-406	磨石	砥石?	SD2479	長さ: 5.6 幅: 4.4 厚さ: 3.4 重さ: 110 g	表面: 580		10-4
5	K-407	磨石	磨石	SD2479	長さ: 5.1 幅: 5.8 厚さ: 4.4 重さ: 200 g	表面: 280		10-5

第24図 SD2479溝跡出土遺物

【ピット】

今回の調査では20基のピットが検出された。平面形状は円形や梢円形を基調としたものが主体であり、直径は約20~50cmである。深さは約10~70cmを測る。柱頭跡は検出されていない。遺物は出土していない。

3.まとめ

今回の第284次調査区からは溝跡が3条(SD2150・SD2478・SD2479)、ピット20基が検出された。このうちSD2150溝跡についてはI期官衙に伴う遺構と考えられており、SD2478・SD2479溝跡についてはそれ以降の時期の遺構と考えられる。SD2150溝跡と第171次調査で検出されているSD2125溝跡は連続する溝跡とみられ、I期官衙東辺を構成する複数の材木列跡や一本柱跡のうちで最も東側に位置すると考えられている。SD2478溝跡については、南隣の第178次調査区で検出されているSD2193溝跡と同一の溝跡である可能性が考えられる。

今回の第284次調査区では、現時点でI期官衙の最も外側を区画していると考えられるSD2150溝跡が検出されたが、第285次調査で当該溝跡の東側を調査しているため、周辺調査区との検討およびまとめについては次節で行う。



1. 調査区全景遺構検出状況（南から）



2. SD2150完掘状況（南から）



3. 調査区全景遺構完掘状況（南から）



4. SD2150南壁土層断面（北から）



5. 調査区東壁（北半）土層断面（西から）



6. 調査区東壁（南半）土層断面（西から）

写真図版9 第284次調査区



写真図版10 第284次調査出土遺物

VI 第285次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第285次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成30年6月6日付けて申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年6月8日付H30教生文第102-109号で回答)に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡I期官衙中枢部の前面(東面)付近に位置する。平成15年度に調査が行われた第152次調査区、平成17年度に調査が行われた第171次調査区の南側に位置し、平成18年度に行われた第178次調査区の北側に位置する。(第2・26図)

調査は平成30年8月1日に着手し、建築予定範囲内に東西5.0m、南北6.0mの規模で調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅰ～Ⅲ層を掘り下げ、Ⅳ層上面(GL-0.9～1.1m)で遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図をS=1/40、断面図をS=1/20で作製し、写真はデジタルカメラを用いて撮影した。9月7日に調査を終了し、その後重機により埋め戻しを行った。



第25図 第285次調査区配置図



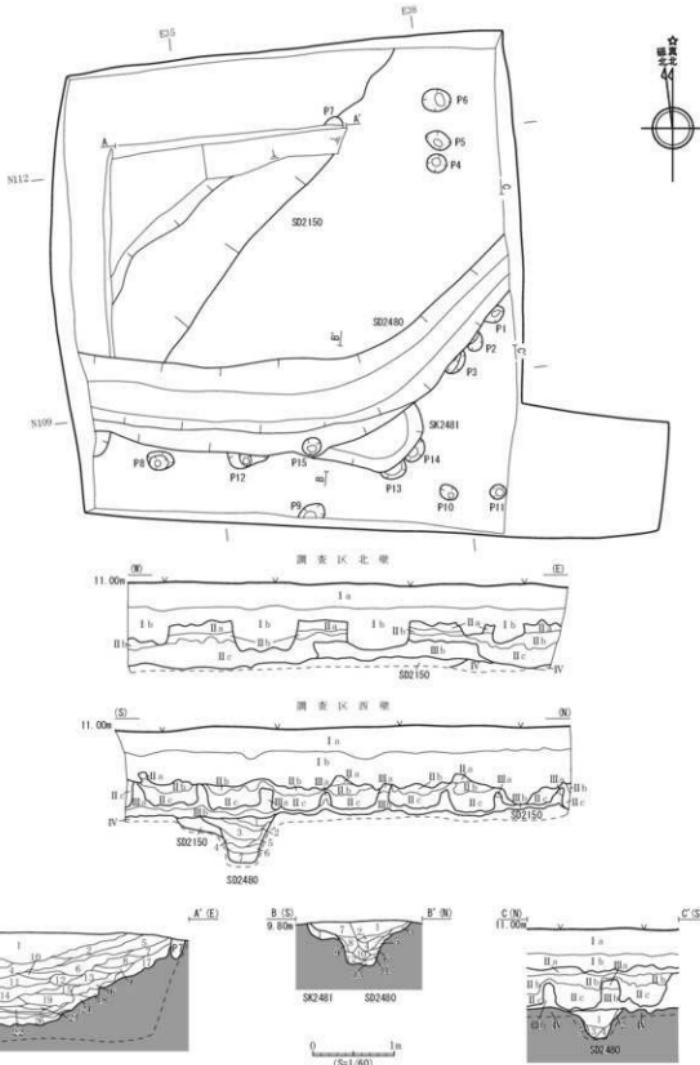
第26図 第285次調査区位置図

2. 検出遺構と出土遺物

検出された遺構は、溝跡2条、土坑1基、ピット15基である。遺物は、SD2480溝跡から磨石が出土している。

【SD2150溝跡】

調査区の北西側で検出された北東～南西方向の溝跡であり、第178次調査で検出されているSD2150溝跡同一の溝跡であると判断した。SD2480溝跡、P7より古い。調査区の関係上、溝跡の東側のみの検出となっている。規模は検出長が約6.3mで、調査区外にさらに延びる。方向はN-34°-Eで、検出した幅は上端が約3.0m、下端が約1.0mである。中端はあまり明瞭ではなく、断面形状は底面がまだ平坦な逆台形を呈するとみられる。遺構検出面から底面までの深さは約1.2mで、堆積土は26層に細分される。1・2層は人為的に埋め戻されたと考えられるが、3層以下の層は自然堆積層とみられる。なかでも下部の層については、粘土と砂が細かい互層を成している層も確認されており、水成堆積と考えられる。遺物は出土していない。



地塊名	層位	色調	土質	備考・混入物	
				1a	1b
基本層	I a	1095-4: 黄褐色	シルト	粘土	
	I b	1095-41: ぶい黄褐色	砂	I a-b層にブロックを含む一部薄い縫状に鉢石を含む	
	II a	1095-214: 黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒を含む	
	II b	1095-31: ぶい黄褐色	粘土	炭化物(40cm-13cm)を含む	
	II c	1095-31: ぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を縫状に含む	
	III a	1095-40: 黄褐色	シルト質粘土	石英砂を多量含む	
	II b	1095-4: 黄褐色	シルト質粘土	1093-3-3/4層褐色粘土を粒-大ブロック状に多量含む 鉢石を多量含む	
	IV	1095-41: ぶい黄褐色	粘土	238X3淡黄色-1095-1層灰色粘土を粒-小ブロック状に含む	

第27図 第285次調査区平・断面図

属名	種名	色調	土質	備考・混入物
S23150	1 1093/3 黒褐色	粘土	程一大プロック状に塊状に混ざる	
	1093/1 黒褐色	粘土		
	1093/5 黄褐色	粘土		
	1093/7 にいぶ 黄褐色	粘土		
	1093/4 にいぶ 黄褐色	粘土	小~中プロック状に塊状に混ざる マンガン鉱を中量含む	
	1093/1 黑褐色	粘土		
	3 1093/5 にいぶ 黄褐色	シリト質粘土	1093/6/4にいぶ 黄褐色粘土を粒~小プロック状に含む 酸化鉄鉱・マンガン鉱を多量含む 斧削粒を中量含む	
	4 1093/5 黄褐色	粘土	一部薄層状に塊状に混ざる 斧削粒を含む 1093/5/1 黒褐色粘土を粒~小プロック状に含む 酸化鉄・マンガン鉱を多量含む	
	5 1093/4 黄褐色	粘土質シルト	斧削粒を小~中プロック状に多量含む 1093/6/1 黄褐色粘土を粒~小プロック状に中量含む 斧削粒を中量含む	
	6 1093/4 黑褐色	粘土	1093/5/2 黑褐色粘土を粒~大プロック状に中量含む 斧削粒を中~中プロック状に中量含む 酸化鉄・マンガン鉱をやや多量含む	
S23480	7 1093/5/2 にいぶ 黄褐色	粘土	1093/7/4にいぶ 黄褐色粘土と塊状に混ざる	
	8 1093/4 にいぶ 黄褐色	粘土	斧削粒と 1093/6/1 黃褐色粘土を粒~小プロック状に塊状に混ざる	
	9 1093/4 にいぶ 黄褐色	粘土	1093/7/4にいぶ 黄褐色粘土と塊状に混ざる 1093/5/1 黄褐色粘土を粒~大プロック状にやや多量含む	
	10 1093/5 黄褐色	砂質粘土	一混相を含む 有機物を少量含む マンガニ鉱を多量含む 酸化鉄鉱を多量含む	
	11 2387/2 黑褐色	砂質粘土	酸化鉄鉱を微量含む 1093/5/1 黄褐色粘土を粒~中プロック状に中量含む 1093/6/1 黄褐色粘土を粒状または薄層状に含む 1093/5/1 黑褐色粘土を粒~中プロック状に少量含む	
	12 1093/6/2 黄褐色	粘土	塊状に混ざる 斧削粒を粒~中プロック状にやや多量含む マンガニ鉱・酸化鉄鉱をやや多量含む	
	13 1093/5/3 にいぶ 黄褐色	粘土	斧削粒を粒~中プロック状に多量含む 1093/7/1 黑褐色粘土を粒~小プロック状に多量含む マンガニ鉱を極多量含む	
	14 1093/7 にいぶ 黄褐色	砂質粘土	1093/5/1 黄褐色粘土を粒~大プロック状に少量含む 1093/6/1 黄褐色粘土を粒~中プロック状に中量含む 酸化鉄・マンガニ鉱を含む	
	15 1093/5/3 黑褐色	粘土	斧削粒を小~中プロック状に多量含む	
	16 1093/1 黑褐色	粘土	程~小プロック状に塊状に混ざる マンガニ鉱を極多量含む 酸化鉄鉱を少量含む	
B-B'	1093/7/4 にいぶ 黄褐色	粘土		
	1093/6/4 にいぶ 黄褐色	粘土	塊状に混ざる 1093/5/1 黑褐色粘土を粒~小プロック状に少量含む マンガニ鉱をやや多量含む 酸化鉄鉱を少量含む	
	1093/7/4 にいぶ 黄褐色	粘土		
	1093/6/2 黑褐色	砂質粘土		
	1093/7/1 黑褐色	砂質粘土		
	1093/8/2 黑褐色	粘土		
	1093/6/2 黑褐色	粘土	程~中プロック状に塊状に混ざる 1093/2/1 黑色粘土を多量含む 酸化鉄を多量含む	
	1093/8/2 黑褐色	粘土		
	2389/2 黑褐色	砂質粘土		
	2389/2 黑褐色	粘土		
S23480	1 1093/4 黑褐色	粘土	1093/5/1にいぶ 黄褐色粘土と塊状に混ざる 1093/7/4にいぶ 黄褐色粘土を粒~小プロック状に中量含む	
	2 1093/3 黑褐色	粘土		
	2 1093/7/4 にいぶ 黄褐色	粘土	小プロック状に塊状に混ざる	
	3 1093/4 黑褐色	粘土	斧削粒を粒~中量含む 酸化鉄鉱を微量含む	
	4 1093/5/2 黑褐色	粘土	程~小プロック状に塊状に混ざる	
	5 1093/4 黑褐色	粘土	マンガニ鉱を多量含む 斧削粒を少量含む 酸化鉄を微量含む	
	6 1093/4 にいぶ 黄褐色	粘土	粒状に混狀に混ざる	
	7 1093/3 にいぶ 黄褐色	シリト質粘土	1093/5/1 黑褐色粘土と 1093/7/4 にいぶ 黄褐色粘土を粒~中量含む	
	8 1093/5/1 黑褐色	粘土	1093/3 黑褐色粘土と塊状に混ざる 1093/7/4 にいぶ 黄褐色粘土を粒~小プロック状に多量含む	
	9 1093/5/4 黄褐色	粘土	1093/3 黑褐色粘土と塊状に混ざる 1093/7/4 にいぶ 黄褐色粘土を粒~中~中プロック状に多量含む	
S23480	10 1093/5/4 黑褐色	粘土	1093/3 黑褐色粘土と塊状に混ざる 1093/7/4 にいぶ 黄褐色粘土を粒~小プロック状に中量含む	
	11 1093/5/4 黑褐色	粘土	程~小プロック状に塊状に混ざる	
	12 1093/5/4 黄褐色	粘土	程~小~中プロック状に塊状に混ざる マンガニ鉱を含む	
	13 1093/7/4 にいぶ 黄褐色	粘土	1093/5/1 黑褐色粘土を粒~小プロック状に少量含む	
	1 1093/3 黑褐色	粘土		
	2 1093/3 黑褐色	粘土	ブロック状に塊状に混ざる	
	3 1093/2 黑褐色	粘土		
	4 1093/3 黑褐色	粘土	斧削粒・大プロック状に塊状に混ざる	
	5 1093/3 黑褐色	粘土	斧削粒と大プロック状に塊状に混ざる	
S23480	1 1093/5 黑褐色	粘土	斧削粒と中量含む マンガニ鉱を中量含む	
	2 1093/5 黑褐色	粘土	1093/7/4にいぶ 黄褐色粘土と塊状に混ざる マンガニ鉱を中量含む	
	3 1093/3 黑褐色	粘土	1093/5/1 黄褐色粘土と塊状に混ざる 斧削粒と少量含む マンガニ鉱を中量含む	
	4 1093/4 黑褐色	粘土	1093/4にいぶ 黄褐色粘土と塊状に混ざる 斧削粒を少量含む マンガニ鉱を中量含む	
	5 1093/3 黑褐色	粘土	1093/4 黄褐色粘土と塊状に混ざる 斧削粒を中量含む マンガニ鉱を中量含む	
	6 1093/3 黑褐色	粘土	1093/4 黄褐色粘土と塊状に混ざる 斧削粒を中量含む マンガニ鉱を中量含む	
	7 1093/1 黑褐色	粘土	程~大プロック状に塊状に混ざる マンガニ鉱を中量含む	
S23481	1 1093/3 黑褐色	シリト質粘土	程~プロック状に塊状に混ざる 1093/5/1 黑褐色粘土を含む	
	1093/5/4 にいぶ 黄褐色	粘土		

表4 第285次調查 土層注記表

[SD2480溝跡]

調査区の南側で検出された溝跡である。西から北東へ湾曲しており、遺構断面の観察から掘り直しが行われたと考えられる。SD2150溝跡より新しい。規模は検出長が約5.5mで、調査区外にさらに延びる。上端幅が55~120cm、下端幅が18~40cmで、断面形状はU字形または逆台形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは35~60cmで、堆積土は場所により5~13層に細分される。遺物は磨石が5点（K-408・第28図1、K-409・第28図2ほか）出土している。



第28図 SD2480溝跡出土遺物

[SK2481土坑]

調査区の南東側で検出された。SD2480溝跡より古い。平面形は円形を基調としたものと推測され、規模は東西140cm以上、南北100cm以上で、深さは約20cmである。断面形状は浅い皿形を呈すると推測される。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

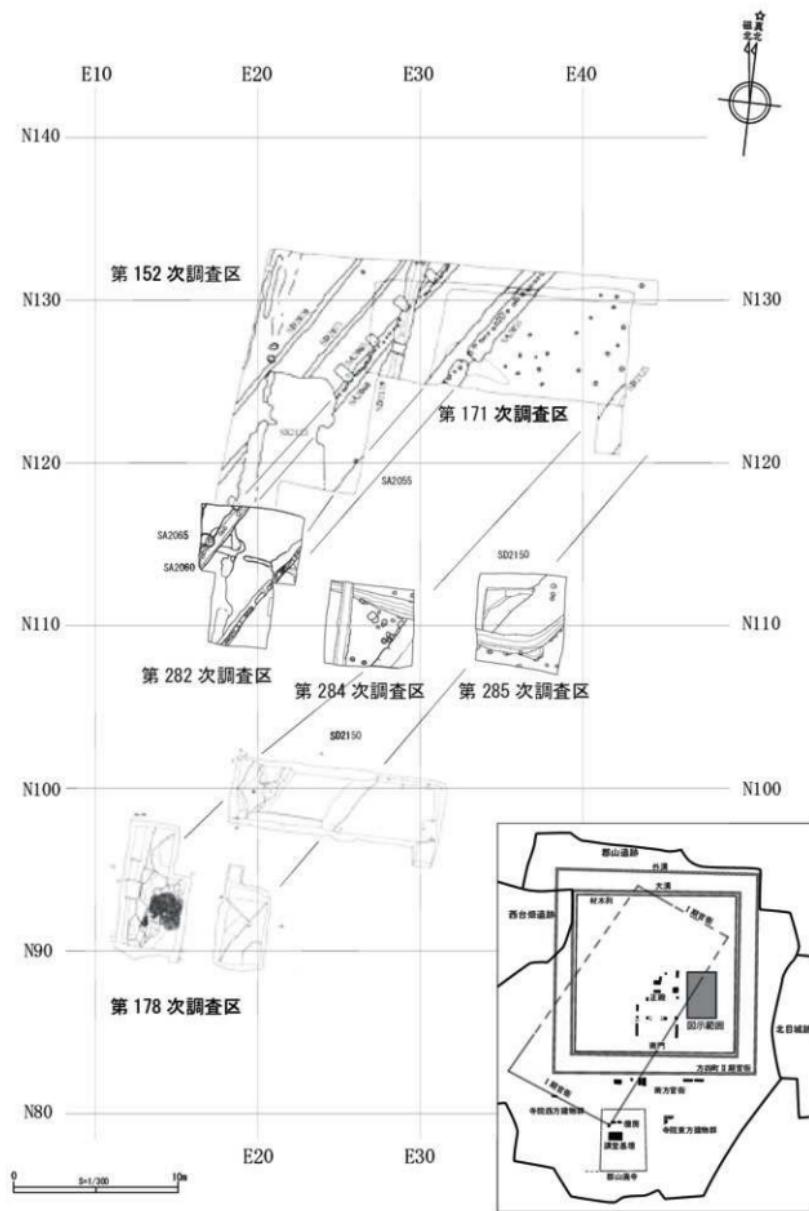
[ピット]

今回の調査区からは15基のピットが検出された。平面形状は円形や梢円形を基調としたものが主体であり、直径は約20~50cmである。深さは約10~40cmを測る。柱痕跡は検出されていない。遺物は出土していない。

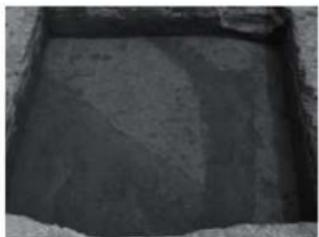
3.まとめ

今回の第285次調査区からは溝跡が2条（SD2150・SD2480）、土坑1基（SK2481）、ピット15基が検出された。このうち、SD2150溝跡についてはI期官衙に伴う遺構と考えられており、SD2480溝跡についてはそれ以降の時期の遺構と考えられる。SD2150溝跡と第171次調査で検出されているSD2125溝跡は連続する溝跡とみられ、I期官衙東辺を構成する複数の材木列跡や一本柱列のうちで最も東側に位置すると考えられている。第284・285次調査で共通して、SD2150溝跡の下層部は水成堆積層と考えられ、細砂と粘土が互層状を成す箇所も確認されている。同様の層相は第178次調査でも確認されており、当該溝には流れがなく澁んだ状態もあったと考えられている（仙台市教育委員会2007）。また、第178次調査で検出した範囲での溝の上端幅は約6mであったが、第284・285次調査区で検出した範囲を合成した場合、溝跡の上端幅は約4.5~5mになると推測され、溝幅が一定ではない可能性がある。また、第178次調査で確認されていた西壁側のテラス状の段が第284次調査では確認されていないなど、SD2150溝跡の様相に違いがみられる（第29図）。

今回の第285次調査区では、現時点でI期官衙の最も外側を区画していると考えられるSD2150溝跡が検出されたが、周辺の調査事例と比較したところ溝跡の様相は一定ではないことが予想されるため、今後も周辺での調査を行い、配置や規模などについて検討していく必要がある。



第29図 周辺調査区と遺構配置



1. 調査区全景遺構検出状況（西から）



2. SD2150完掘状況（南から）



3. 調査区全景遺構完掘状況（東から）



4. SD2150北壁土層断面（南から）

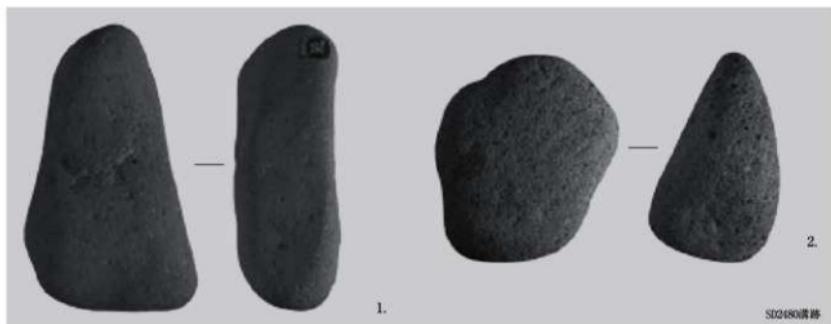


5. 調査区西壁（南半）土層断面（東から）



6. 調査区西壁（北半）土層断面（東から）

写真図版11 第285次調査区



写真図版12 第285次調査出土遺物

VII 第289次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第289次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成30年7月30日付けて申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年8月2日付H30教生文第102-199号で回答)に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡Ⅰ期官衙中枢部の前面(東面)付近に位置する。平成15年度に調査が行われた第152次調査区、平成17年度に調査が行われた第171次調査区の南東側に位置し、平成18年度に行われた第178次調査区の東側に位置する。(第2・31図)

調査は平成30年10月24日に着手し、建築予定範囲内に東西5.0m、南北3.0mの規模で調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅱ層まで掘り下け、Ⅲ層上面(GL-1.0m)で遺構検出作業を行った。調査の記録は、平面図をS=1/40、断面図をS=1/20で作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。10月24日に調査を終了し、その後重機により埋め戻しを行った。



第30図 第289次調査区配置図



第31図 第289次調査区位置図

2. 検出遺構と出土遺物

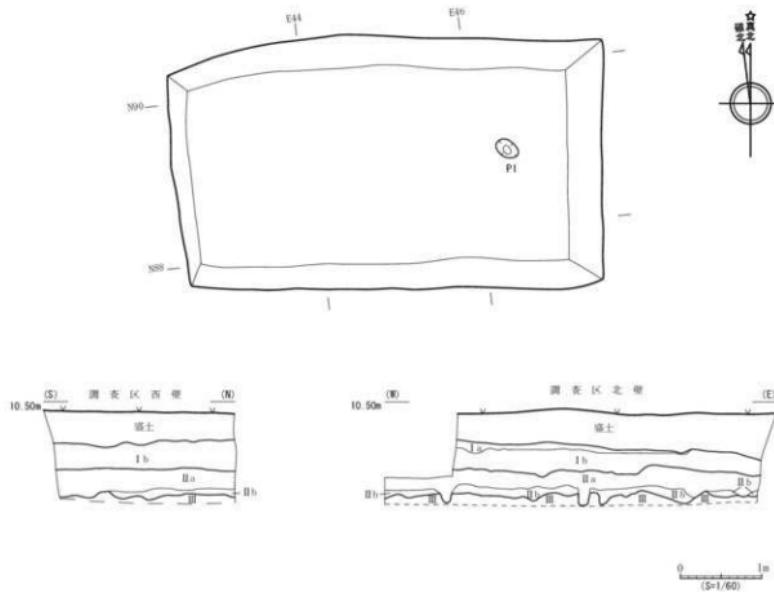
検出された遺構はピット1基である。遺構および基本層から遺物は出土していない。

【ピット】

調査区の東側で検出された。平面形状は円形を呈し、直径は約30cmである。柱洞跡は検出されていない。

3. まとめ

第289次調査区は郡山遺跡Ⅰ期官衙中枢部の前面(東面)付近に位置する。平成15年度に調査が行われた第152次調査区、平成17年度に調査が行われた第171次調査区の南東側に位置し、平成18年度に行われた第178次調査区の東側に位置する。今回の調査地点はⅠ期官衙東辺の東側にあたるが、ピットを1基確認したのみであり、Ⅰ期官衙の外郭東辺における遺構の分布は、希薄である可能性も考えられる。今後も周辺における調査を重ね、主要な官衙城の外側における遺構の分布状況についても検討していく必要がある。



第32図 第289次調査区平・断面図



1. 調査区全景・構造状況（北東から）



2. 調査区北壁土層断面（南西から）

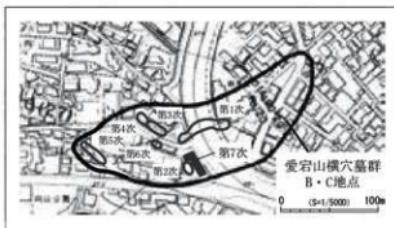
写真図版13 第289次調査区

第3章 愛宕山横穴墓群—第7次調査—

1. 遺跡の位置と環境

愛宕山横穴墓群の今回の調査地点は、JR仙台駅より南方約2.5km、仙台市太白区向山4丁目に所在する。広瀬川右岸の愛宕山丘陵下部の南斜面に立地する。愛宕山横穴墓群では、愛宕山北斜面側のA地点と、南斜面側のB・C地点が確認されており、今回の調査地点はC地点にある。向山一帯では数多くの横穴墓が確認されており、愛宕山の南に位置する大年寺山の丘陵斜面には、北東斜面に大年寺山横穴墓群、南西斜面に茂ヶ崎横穴墓群、二ツ沢横穴墓群などがある。これらの横穴墓群の築造については、南東約2.0kmに位置する郡山遺跡との関連が指摘されている。

愛宕山横穴墓群では、これまでに6次の調査が行われている（第33図）。第1次調査（昭和48年）ではB地点の南斜面側で10基の横穴墓が確認され、うち9基が調査されている。第2次調査（昭和51年）ではB地点より一段低位の地点で道路工事中に偶然発見されたC地点横穴墓の調査が行われ、装飾横穴墓を含む2基の横穴墓が確認されている。装飾横穴墓（1号墓）は玄室奥壁に赤色顔料で円文や平行線、円文と十字やT字を組み合わせた文様が描かれており、人骨5体分と刀子、土器器坏が出土している。2号墓については検出されたのみであり、併せてA地点の横穴墓2基についての測量調査も行われている。第3次調査（平成3年）ではB地点で18基の横穴墓が確認されており、うち15基が調査されている。第4次調査（平成9年）はその西隣で調査が行われ、1基の横穴墓が確認されている。第5次調査（平成21年）はB地点の西側に連続した、より標高の低い地点で調査が行われ、2基の横穴墓が確認されている。第6次調査（平成24年）は第3次調査南側の一段低位の地点で調査が行われたが、横穴墓は確認されていない。愛宕山横穴墓群ではこれまでの調査で33基の横穴墓が確認されているが、その多くは後世のカクランや削平を受けていることから、実際に築かれた横穴墓の数はさらに多かったと考えられている。



第33図 第7次調査区位置図

2. 調査経過と調査方法

今回の調査は範囲確認調査である。愛宕山横穴墓群内の道路用地において、災害時の一時避難場所設置に係る検討が行われるにあたり、当該地に装飾横穴墓が所在することから、周辺への横穴墓の広がりを確認するため調査を実施した。

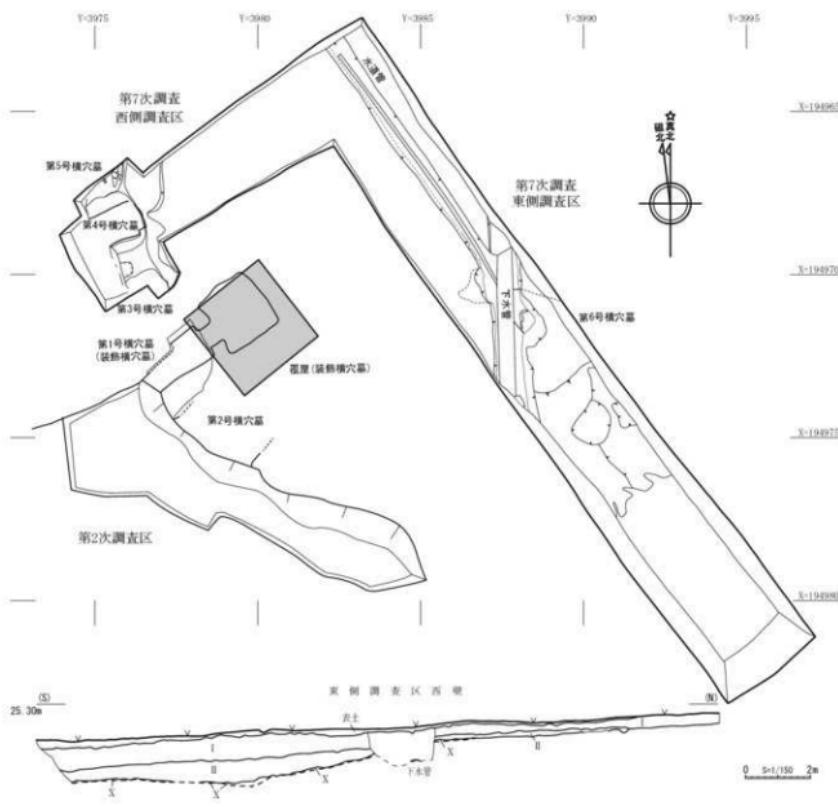
今回の調査地点は、愛宕山横穴墓群C地点の南部で、昭和51年度に調査が行われた第2次調査区の北～東側に位置する。（第33図）調査は平成30年1月9日に着手し、調査地の状況に合わせて、長さ約24m、幅約3.2mの東側調査区と、長さ8.4m、幅約2.8mの西側調査区を設定した。なお、西側調査区は遺構の検出状況に合わせて部分的に幅を0.5m拡張している。重機により盛土を掘り下げ、凝灰岩地盤において遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図をS=1/20・1/40、断面図をS=1/20で作製し、写真はデジタルカメラを用いて撮影した。1月26日に調査を終了し、その後重機により埋め戻しを行った。



第34図 第7次調査区配置図

3. 検出遺構と出土遺物

検出された遺構は横穴墓4基である。C地点ではこれまでに2基の横穴墓が検出されているため、今回検出した横穴墓は第3～6号横穴墓とした。遺構確認にとどめたため、遺物は出土していない。



第35図 第2・7次調査区平面合成図、第7次調査区壁断面図

【第3号横穴墓】

第1号横穴墓（装飾横穴墓）の北西側に隣接する位置で検出された。調査区の制約上、北側の幅約90cmのみの検出であるが、一部で玄門部とみられるアーチ状の構造を確認しており、西南側に開口する横穴墓の羨道～玄門であると考えられる。玄室は検出していないが、東側には耐候岩の地盤を確認しているため、残存していると考えられる。

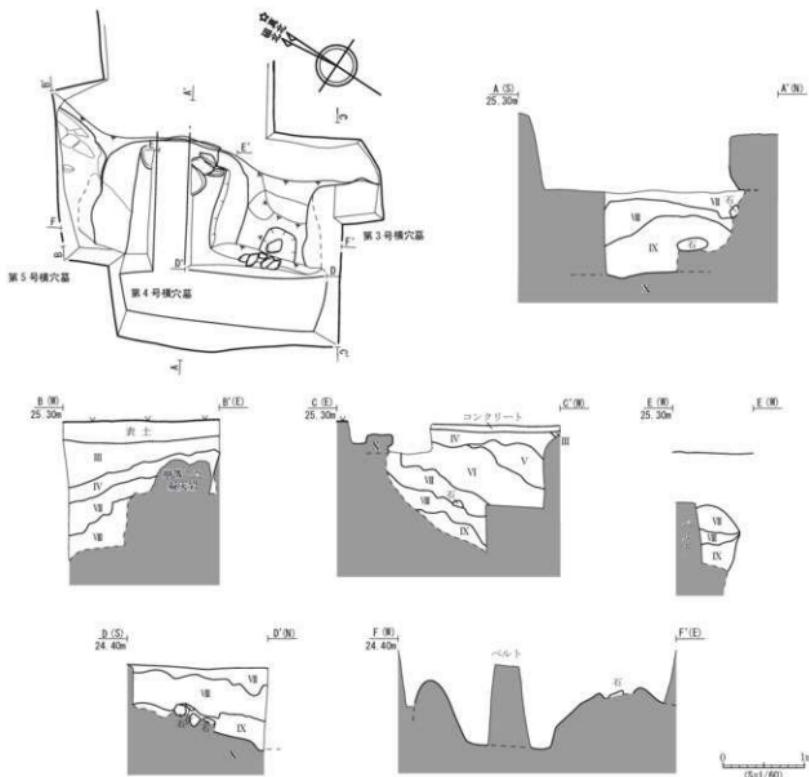
【第4号横穴墓】

第3号横穴墓の北西側に隣接する位置で検出された。羨道と玄門を検出している。羨道は床面幅100~110cm、奥行140cm以上で、上部は削平のため失われている。玄門は幅80cm以上、高さ80cm以上で、奥行は不明である。羨道

と玄門の境で幅約10cmの溝を検出しており、閉塞施設に伴うものと考えられる。また、元位置を保ってはいないが、閉塞石とみられる河原石も確認されている。装飾横穴墓と羨道床面の標高で比較すると、第4号横穴墓が約50cm低い位置にある。玄室は検出していないが、東側には凝灰岩の地盤を確認しているため、残存していると考えられる。

【第5号横穴墓】

第4号横穴墓の北西側に隣接する位置で検出された。南側の幅約80cmのみの検出であるが、一部でアーチ状の構造を確認しており、西側に開口する横穴墓であると考えられる。崩落した凝灰岩ブロックが堆積しており、詳細は不明であるが、東側奥に若干の空洞を確認しており、天井部が残存しているとみられる。東側には凝灰岩の地盤を確認しているため、玄室は残存していると考えられる。

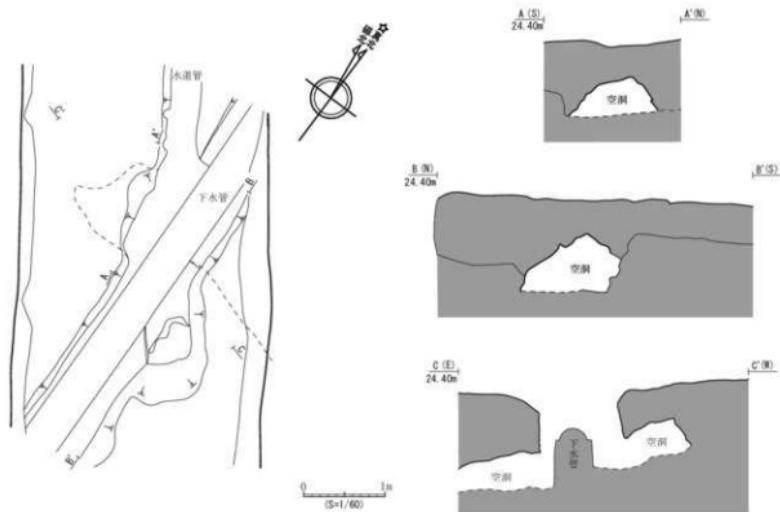


層位	色調	土質	備考・入出物
Ⅲ	10YR2/3 黒褐色	シルト	縛（φ2~10cm）を多量含む。屢底部にコンクリート片を含む。炭化物（φ2~5cm）を含む。
Ⅳ	10YR2/3 黒褐色	シルト	縛（φ2~20cm）を多量含む。10YR5/6 暗褐色シルト小粒ブロック（φ2~5cm）を複数に含む。部分的に礁土・炭化物を含む。
Ⅴ	10YR4/4 開白色	シルト	10YR5/6 暗褐色シルトブロックを複数に含む。凝灰岩ブロック（φ2~10cm）を含む。プラスチックを含む。縛（φ2~10cm）を少量含む。
VI	10YR4/4 明褐色	シルト	10YR5/6 暗褐色シルトブロックを複数に含む。炭化物（φ2~3cm）を含む。縛（φ2~10cm）を含む。
Ⅶ	10YR4/6 開白色	シルト	縛（φ10~15cm）を多量含む。10YR5/6 暗褐色シルトブロックを複数に含む。凝灰岩ブロック（φ2~15cm）を含む。
Ⅷ	10YR4/6 明褐色	砂質シルト	凝灰岩ブロック（φ2~5cm）を含む。（一部10YR5/6 暗褐色に変色）。縛（φ5~10cm）を少量含む。部分的に河原石（φ20cm程）を多量含む。
IX	23YR4/26 白色	砂質シルト	凝灰岩ブロック（φ10cm程）を含む。（一部10YR5/6 暗褐色に変色）
X	10YR4/16 白色	凝灰岩	

第36図 第3～5号横穴墓平・断面図

【第6号横穴墓】

第1号横穴墓（装飾横穴墓）の東側で検出された。水道管と下水管を設置した際のカクランの壁面において、向かい合う位置に開口する空洞が確認されたが、内部の崩落が著しいため、横穴墓の羨道～玄門部分の天井部が崩落した状況と推測される。この空洞の下部に横穴墓があるとすると、南東方向に開口すると考えられる。



第37図 第6号横穴墓平面図・見通し図・エレベーション図

【その他】

第3号横穴墓と第4号横穴墓の間に、幅30～45cm、奥行35cmほどのくぼみを確認しており、周辺には河原石が集中している。愛宕山横穴墓群や大年寺山横穴墓群の調査で確認されている袋状の規模が小さい横穴墓と同様の横穴墓である可能性も考えられるが、詳細が不明のため、今回の調査では横穴墓には含めないこととした。

4.まとめ

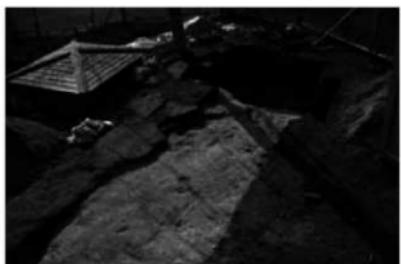
愛宕山横穴墓群ではこれまでに6次の調査が行われており、33基の横穴墓が検出されている。今回の第7次調査区では、C地点の装飾横穴墓周辺で新たな横穴墓が4基検出された。

その結果、愛宕山横穴墓群C地点について以下のような調査成果が得られた。

- ・第3～5号横穴墓が検出されたことにより、C地点には装飾横穴墓に近接して築かれた横穴墓が存在しており、それらの横穴墓は玄室が残存している可能性が高い。
- ・第6号横穴墓が検出されたことにより、装飾横穴墓や第2～6号横穴墓が築かれた場所は、丘陵が小規模な舌状となり、南側に張り出していたことが推測され、その張り出した丘陵の両側に横穴墓が造られていたと考えられる。



1. 第7次調査開始前のようす（北から）



2. 西側調査区全景（北東から）



3. 東側調査区全景（南東から）



4. C地点第3～5号横穴墓検出状況（西から）

写真図版14 愛宕山横穴墓群第7次調査区（1）



1. C地点第4号横穴墓玄門（西から）



2. C地点第4号横穴墓ベルト断面（南西から）



3. C地点第3号横穴墓土層断面（北から）



4. C地点第6号横穴墓検出状況（南東から）



5. C地点第6号横穴墓北西侧開口部（南東から）



6. C地点第6号横穴墓南東側開口部（北西から）

写真図版15 愛宕山横穴墓群第7次調査区（2）

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会 1974 「愛宕山横穴群発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第8集
- 仙台市教育委員会 1985 「愛宕山装飾横穴古墳発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第85集
- 仙台市教育委員会 1987 「郡山遺跡VII」 仙台市文化財調査報告書第96集
- 仙台市教育委員会 1994 「愛宕山横穴墓群 第3次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第187集
- 仙台市教育委員会 1998 「神明社窯跡ほか」 仙台市文化財調査報告書第232集
- 仙台市教育委員会 2001 「郡山遺跡21」 仙台市文化財調査報告書第250集
- 仙台市教育委員会 2002 「郡山遺跡22」 仙台市文化財調査報告書第258集
- 仙台市教育委員会 2004 「郡山遺跡24」 仙台市文化財調査報告書第269集
- 仙台市教育委員会 2005 「郡山遺跡発掘調査報告書 総括編（1）」 仙台市文化財調査報告書第283集
- 仙台市教育委員会 2006 「郡山遺跡26」 仙台市文化財調査報告書第296集
- 仙台市教育委員会 2007 「郡山遺跡27」 仙台市文化財調査報告書第307集
- 辻秀人他 2007 「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」
平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 仙台市教育委員会 2010 「上野遺跡他」 仙台市文化財調査報告書第372集
- 仙台市教育委員会 2010 「郡山遺跡30」 仙台市文化財調査報告書第373集
- 仙台市教育委員会 2012 「郡山遺跡32」 仙台市文化財調査報告書第406集
- 仙台市教育委員会 2013 「仙台平野の遺跡群23」 仙台市文化財調査報告書第415集
- 仙台市教育委員会 2016 「郡山遺跡36」 仙台市文化財調査報告書第450集
- 仙台市教育委員会 2017 「杏形遺跡他」 仙台市文化財調査報告書第458集
- 仙台市教育委員会 2018 「郡山遺跡38」 仙台市文化財調査報告書第470集

第4章 調査成果の普及と関連活動

年月日	行事名称	担当	対象
2018. 4.17	郡山中ビロティ見学	三浦	一般15名
4.18	郡山中ビロティ見学	五十嵐	一般10名
5.2	郡山中ビロティ見学	三浦	仙台市立八木松小学校6年生
5.23~25	職場体験	三浦	仙台市立長町中学校2年生5名
5.29	出前授業「郡山遺跡」	三浦	仙台市立八木松小学校6年生
6.16	郡山中ビロティ見学	三浦	一般14名
7.6	出前授業「郡山遺跡」	三浦	仙台市立東長町小学校6年生
7.1	美化活動・ビロティ見学	小野寺・庄子・三浦	仙台市立東長町小学校6年生
7.13	美化活動	尾形・齋藤・三浦	仙台市立八木松小学校6年生
7.18	出前授業「郡山遺跡」	及川	仙台市立郡山中学校1年生
8.22~24	職場体験	三浦	仙台市立八木山中学校2年生5名
8.27	郡山中ビロティ見学	三浦	仙台市立郡山中学校1年生
8.28~30	職場体験	三浦	仙台市立郡山中学校2年生3名
10.13	郡山中ビロティ見学	齋藤	一般40名
10.22	郡山中ビロティ見学	五十嵐	一般28名
10.24	職場体験	三浦	仙台市立鶴谷中学校2年生3名
11.7	職場体験	三浦	仙台市立南光台中学校2年生3名
11.13	郡山中ビロティ見学	三浦	一般15名
11.14~16	職場体験	三浦	仙台市立富沢中学校2年生5名
11.20~22	職場体験	三浦	仙台市立山田中学校2年生4名
11.21	郡山中ビロティ見学	五十嵐	一般20名
11.27	出前授業「地域の歴史」	三浦	仙台市立東長町小学校4年生
11.28	郡山中ビロティ見学	三浦	一般15名



中学生の職場体験（発掘調査）



中学生の職場体験（整理作業）



小学生の美化活動



郡山中ビロティ見学

報 告 書 抄 錄

仙台市文化財調査報告書第478集

郡山遺跡 39

—平成30年度発掘調査概報—

2019年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区上杉一丁目5-12

上杉分庁舎10F

文化財課 TEL 022 (214) 8893

印 刷 毛 リ タ 印 刷 株 式 会 社

仙台市太白区郡山八丁目30-30

TEL 022 (246) 0105
